前原西町遺跡Ⅱ

福岡県前原市前原字西町所在遺跡の調査報告

前原市埋蔵文化財調査報告書

第 84 集

2003

前原市教育委員会

前原西町遺跡 II

福岡県前原市前原字西町所在遺跡の調査報告

前原市埋蔵文化財調査報告書

第 83 集

2003

前原市教育委員会

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
　１．調査に至る経緯……1
　２．調査の組織……1
　３．調査の経過……1
Ⅱ．位置と環境……2
　１．地理的環境……2
　２．歴史的環境……2
Ⅲ．調査の記録……5
　１．Ａ区の調査……5
　（１）調査の概要……5
　（２）基本層序……5
　（３）古墳時代の遺構……7
　（４）奈良時代の遺構 ……11
　（５）出土遺物 ……12
　２．Ｂ区の調査 ……13

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1／50000）
第２図　前原西町遺跡２位置図（1／20）
第３図　Ａ区基本層序土層断面実測図（1／20）
第４図　Ａ区遺構全体図（1／100）
第５図　Ａ区1号竪穴式住居貼床状況・完掘状況平断面実測図（1／40）
第６図　Ａ区1号竪穴式住居カマド平断面実測図（1／20）
第７図　Ａ区1号掘立柱建物平断面実測図（1／60・1／20）
第８図　Ａ区1号土坑平断面実測図（1／40）
９９図　Ａ区1号竪穴式住居・カマド出土土器実測図（1／3・●は1／4）
第10図　Ａ区1号竪穴式住居カマド・1号掘立柱建物・ピット・包含層出土土器実測図（1／3）
第11図　Ａ区1号竪穴式住居・1号掘立柱建物・ピット・出土瓦質土器・陶質土器実測図（1／3）

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
　１．調査に至る経緯……1
　２．調査の組織……1
　３．調査の経過……1
Ⅱ．位置と環境……2
　１．地理的環境……2
　２．歴史的環境……2
Ⅲ．調査の記録……5
　１．Ａ区の調査……5
　（１）調査の概要……5
　（２）基本層序……5
　（３）古墳時代の遺構……7
　（４）奈良時代の遺構 ……11
　（５）出土遺物 ……12
　２．Ｂ区の調査 ……13

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1／50000）
第２図　前原西町遺跡２位置図（1／20）
第３図　Ａ区基本層序土層断面実測図（1／20）
第４図　Ａ区遺構全体図（1／100）
第５図　Ａ区1号竪穴式住居貼床状況・完掘状況平断面実測図（1／40）
第６図　Ａ区1号竪穴式住居カマド平断面実測図（1／20）
第７図　Ａ区1号掘立柱建物平断面実測図（1／60・1／20）
第８図　Ａ区1号土坑平断面実測図（1／40）
９９図　Ａ区1号竪穴式住居・カマド出土土器実測図（1／3・●は1／4）
第10図　Ａ区1号竪穴式住居カマド・1号掘立柱建物・ピット・包含層出土土器実測図（1／3）
第11図　Ａ区1号竪穴式住居・1号掘立柱建物・ピット・出土瓦質土器・陶質土器実測図（1／3）

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

平成14年6月　日付けで、福岡県前原土木事務所から前原市　地内の道路拡幅工事2300㎡に関して、埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条の3項）が前原市教育委員会に提出された。これを受けて、前原市教育委員会では申請地が北本町遺跡に近接しているため、確認調査の必要を認めた。

確認調査は開発対象地の北側から始め、南端の福岡中央銀行（160㎡）の箇所については解体終了後に行うこととした。その結果、北側から標高を下げながら延びる丘陵の緩斜面上に遺跡の存在が確認された。（Ａ地区）また、県道福岡志摩前原線が商工会館で大きく西側へ曲がる箇所に存在する谷部を挟んで南側にも丘陵は広がり、削平を受けながらもかろうじて残存している遺跡を確認した。（Ｂ地区）

この確認調査の結果を踏まえ、福岡県前原土木事務所と協議を重ねた結果、6月には調査委託に関し合意が得られたので、２箇所の遺跡、Ａ地区（160㎡）Ｂ地区（536㎡）合計696㎡の記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

２．調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成業務（平成14年度）

調査主体者：前原市教育委員会

総括	教育長	菊竹利嗣
	教育部長	上田勇介
	文化課長補佐	中村鉄弥
	兼文化振興係長	
	文化課長	小池史哲
	文化財係長	林　覚
庶務	主事	浜地　克
調査	文化財係主査	瓜生秀文
	主事	江野道和
	主事	江崎靖隆

３．調査の経過

本調査は平成14年6月10日から着手、平成14年8月　日で終了した。以下、調査日誌より抜粋して経過を記したい。

6月10日　Ａ区重機による表土剥ぎを行う。

6月11日　遺構検出を行い、住居跡及び掘立柱建物を確認する。

6月12日　Ａ区南側包含層の掘削に入る。

6月13日　杭打ち・平板測量を行う。

6月14日　１号竪穴式住居の調査開始

6月19日　１号竪穴式住居上層遺物を検出。写真撮影、遺構実測を行う。

6月21日　１号掘立柱建物の調査開始

6月25日　１号竪穴式住居炭化材を検出、１号掘立柱建物の１、２、３号柱穴土層断面実測、写真撮影

6月27日　１号竪穴式住居陶質土器・瓦質土器を検出

7月　2日　１号竪穴式住居貼床検出

7月　8日　１号竪穴式住居カマドの調査開始、１号土坑調査開始

7月　9日　１号竪穴式住居遺物取り上げ終了

7月18日　１号掘立柱建物完掘、写真撮影

7月22日　１号竪穴式住居完掘、写真撮影、実測終了

7月23日　１／20全体実測終了

7月24日　Ａ区全体写真撮影

7月26日　Ａ区調査終了、撤収

Ⅱ．位置と環境

遺跡の所在する前原市は、福岡県の西北端の玄海灘に突き出た糸島半島の付け根部分に位置し、遺跡は、この市の中心部に所在する。旧地形では東南から北西へ向けて伸びる尾根上に立地する。

遺跡の属する時代は大きく弥生時代から古墳時代に至る時期と江戸時代の2期に分けられる。以下、それぞれの特色について個別に述べる。

江戸時代において前原西町遺跡の所在する台地上には唐津藩主が参勤交代に使った「唐津街道」が東西に通じており、宿場町である「前原宿」が置かれていた。この「前原宿」については絵図面などが残されていないため全容は明らかではないが、本陣や町茶屋、脇本陣、代官所などの推定地が各所に散在し、平成11年には番屋の比定地での発掘調査が行われている。弥生時代から古墳時代において前原西町遺跡A地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地である北新地遺跡群に含まれ、小高い尾根上に位置する。弥生時代には今回調査したA地区を含め、周辺には大規模な集落が営まれていたと考えられるが、現在は住宅の密集地となってしまい、発掘調査の事例も少なく昔を窺い知る手掛かりは希少となっているが、過去に2箇所ほど個人住宅の建て替えに伴って調査が行われている。

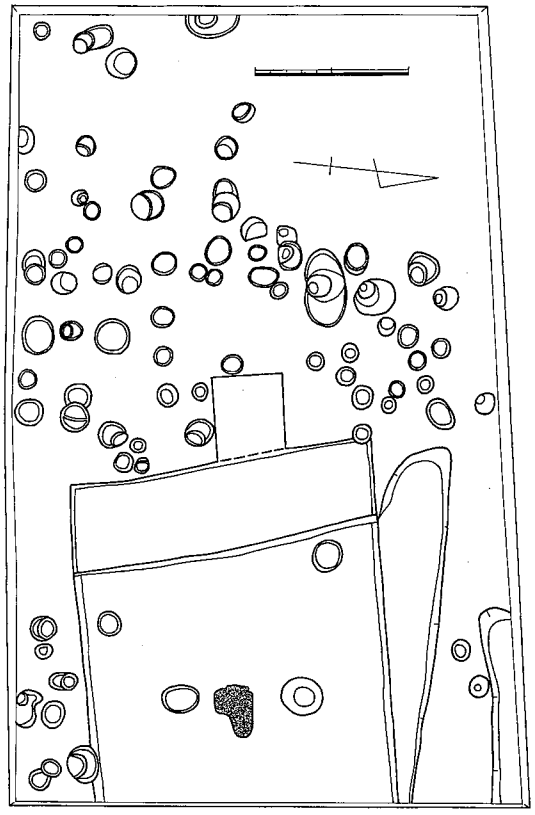
1箇所目は平成13年度に調査された地点で、東に隣接する周知の埋蔵文化財包蔵地である北本町遺跡群内に位置し、現在のりんでん保育園の東南方向に所在する。旧地形では別尾根となっており、方形の竪穴住居1棟とピット多数が検出されている(第■図)。竪穴住居は、東側が調査区外に及んでいるため完掘できなかったが、方形で約4×5mの規模をもち、西側にベッド状遺構をもつことが分かった。柱穴は床面に4本掘削されており、中央の2本の柱の間からは焼土と炭の混じった部分が見つかっており、炉であった可能性が考えられる。住居の時期は、床面から出土した土器から庄内併行期に属するものと推定される。2箇所目は平成14年度に調査された地点で、上記の調査区から北へ120mほど下った場所に所在する。現在の法林寺の北東側であり、遺跡からは、竪穴住居と柱穴多数が検出されたが、いずれも削平により検出状況は悪く、床面がかろうじて残存しているのみであった。時期は出土遺物から庄内併行期と考えられる。

この他、北本町遺跡群の所在する丘陵から谷を隔てて東隣の上町向原遺跡からは、甕棺墓群や環頭大刀が出土し、また南に丘陵を上った地点には上町古墳が所在する。加えて、A地区から同一尾根上を北西に下っていった場所に前原北側古墳が所在することから、弥生時代の終わりごろから古墳時代にかけてこの一帯が集落や墓域として栄えていたことが分かる。

註)

1） 平尾和久『前原西町遺跡』 前原市文化財調査報告書第68集（前原市教育委員会、2000年）。

2） 岡部裕俊『前原地区遺跡群Ⅰ』前原町文化財調査報告書第28集（前原町教育委員会、1988年）。



第１図　前原西町遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1/50,000）

第２図　前原西町遺跡第２次調査地点周辺の地形（1/2,500）

Ⅲ．調査の記録

1．A区の調査

（1）調査の概要

A区は、県道福岡志摩前原線が商工会館で大きく西側へ曲がる箇所の西側隣接地である。当初、本地区は、南北の隣接地の確認調査結果より、遺構は非常に希薄であると考えられていたが、重機による掘削の結果、かなりの削平を受けながらも遺構が存在していることが分かった。旧地形は北から南に向かって緩やかに下がっており、南側では遺物包含層が残存し、逆に北側では県道の造成の際に全て掘削されており、遺構を確認することはできなかった。

A区で検出した遺構・遺物は以下のとおりである。

古墳時代

（遺構）	竪穴式住居	1棟
	掘立柱建物	1軒
（遺物）	土師器	
	半島系土器	
	石器	1点

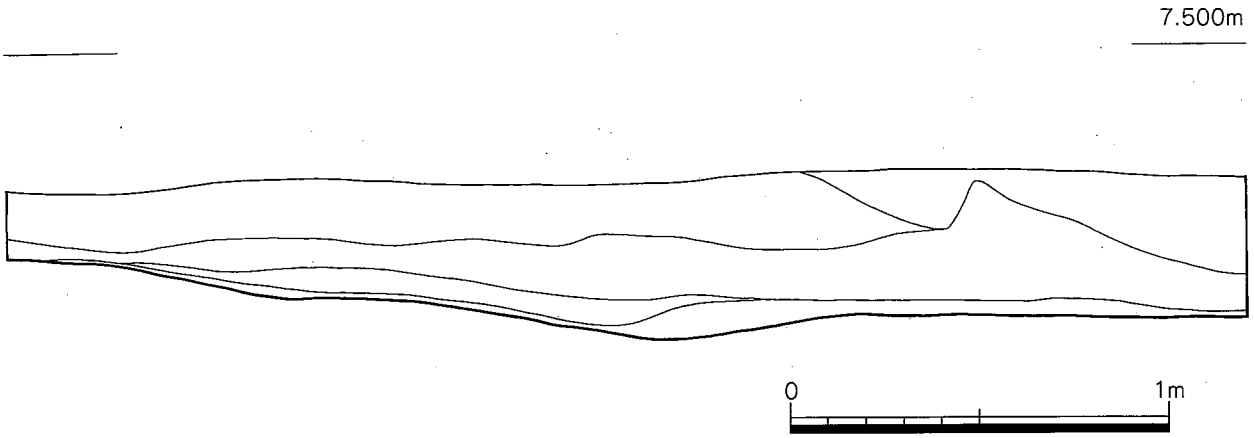
奈良時代

（遺構）	土坑	1基
（遺物）	須恵器	1点
	不明土製品	

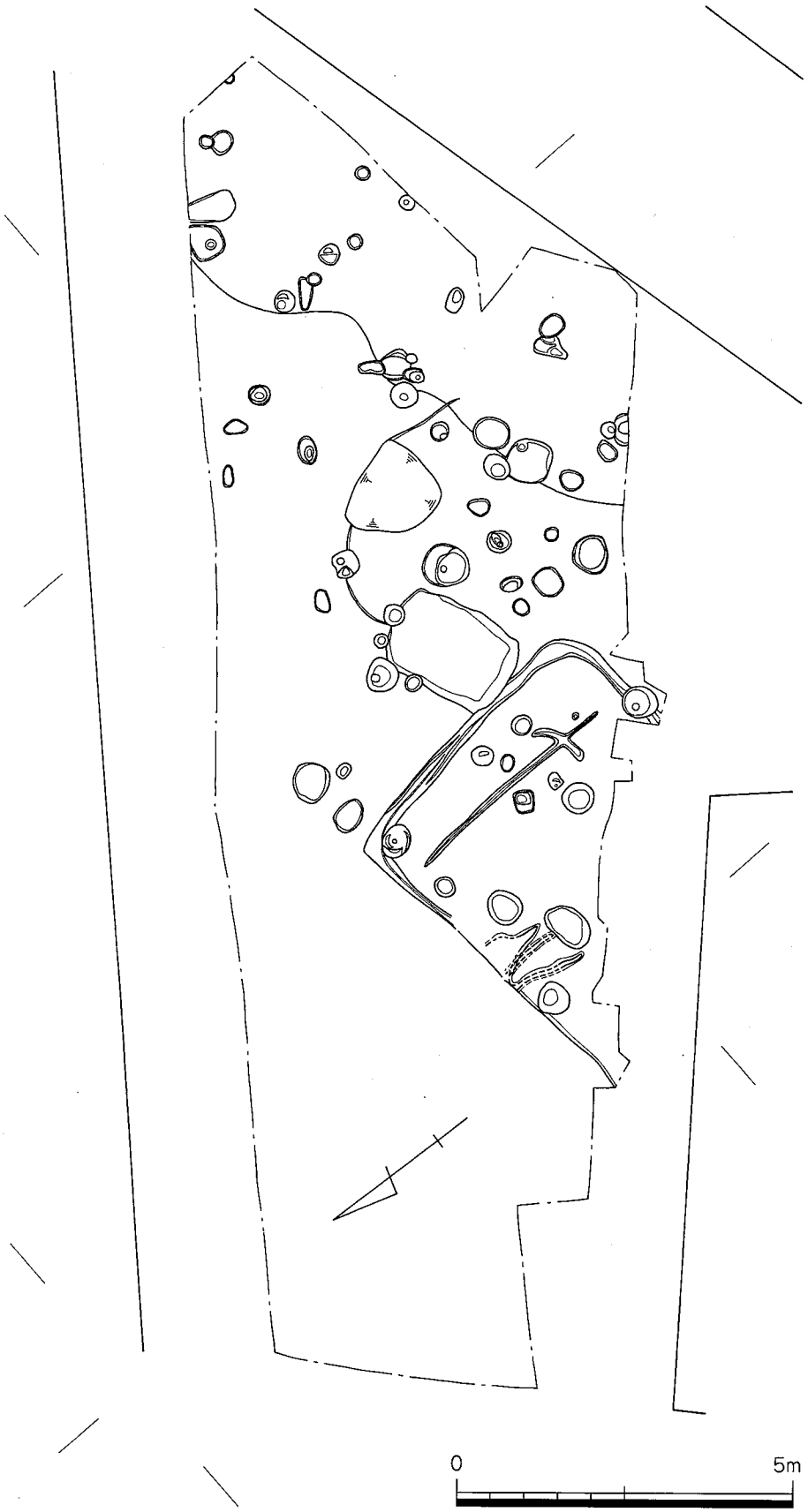
（2）基本層序

A区の基本層序は、調査区西壁に設定した土層断面図で示す。先述したように、旧地形は、北に向かって緩やかに上がっており、その上に遺物包含層である暗茶褐色粘質土層（③層）・明茶褐色粘質土層（⑤層）がのっている。この遺物包含層は、北に向かうにつれて削られて徐々に薄くなっており、畑の耕作土である茶褐色粘質土層（②層）によってさらに削られている。道路の造成土である青緑色砂礫層（①層）は、北側では、耕作土、包含層、遺構面まで大きく削平している。

今回検出されたピット群は、遺物包含層（③・⑤層）からの掘り込みであることが確認された。



第３図　前原西町遺跡２　Ａ区基本序土層断面実測図（1/20）



第４図　前原西町遺跡２　Ａ区遺構全体図（1/100）

（3）古墳時代の遺構

1号竪穴式住居跡

調査区西側ほぼ中央に位置するカマドを持つ長方形プランの住居で、かなり残りが悪く、1号掘立柱建物と1号土坑に切られている。住居の長軸方向は調査区外に延びていて、限界まで調査区を広げたものの、住居隅を検出するに至らず、短軸4.58m×長軸6.29m+αを確認する。住居の埋土を5cm程度下げたところで、かなり残りの悪い炭化材や焼土塊・炭塊が北側半分を中心に散在しており、焼失住居の可能性を含む。特にカマド近辺に炭化材が多く検出され、炭化した藁等も見られたため、カマドに出火原因があることを推測させる。また、この層で風化の著しい土器が多く検出されたが、胴部や口縁部の細片ばかりで、完形になるものはなく、土層観察の結果より、東側から西側への流土に含まれていたものであろう。深さ12～14cmのところで貼床面を検出し、住居掘削面までは深さ20cmで確認した。貼床面では、陶質土器・瓦質土器を検出している。掘削面では壁際に沿っていわゆる排水溝が巡っており、カマド付近では後世の攪乱によって消滅している。住居東側では溝が南北方向に2.34mにわたって走っており、深さ8cm程度で、仕切り溝であろうか。貼床面・掘削面共に精査を行ったが柱穴を確認することができなかった。

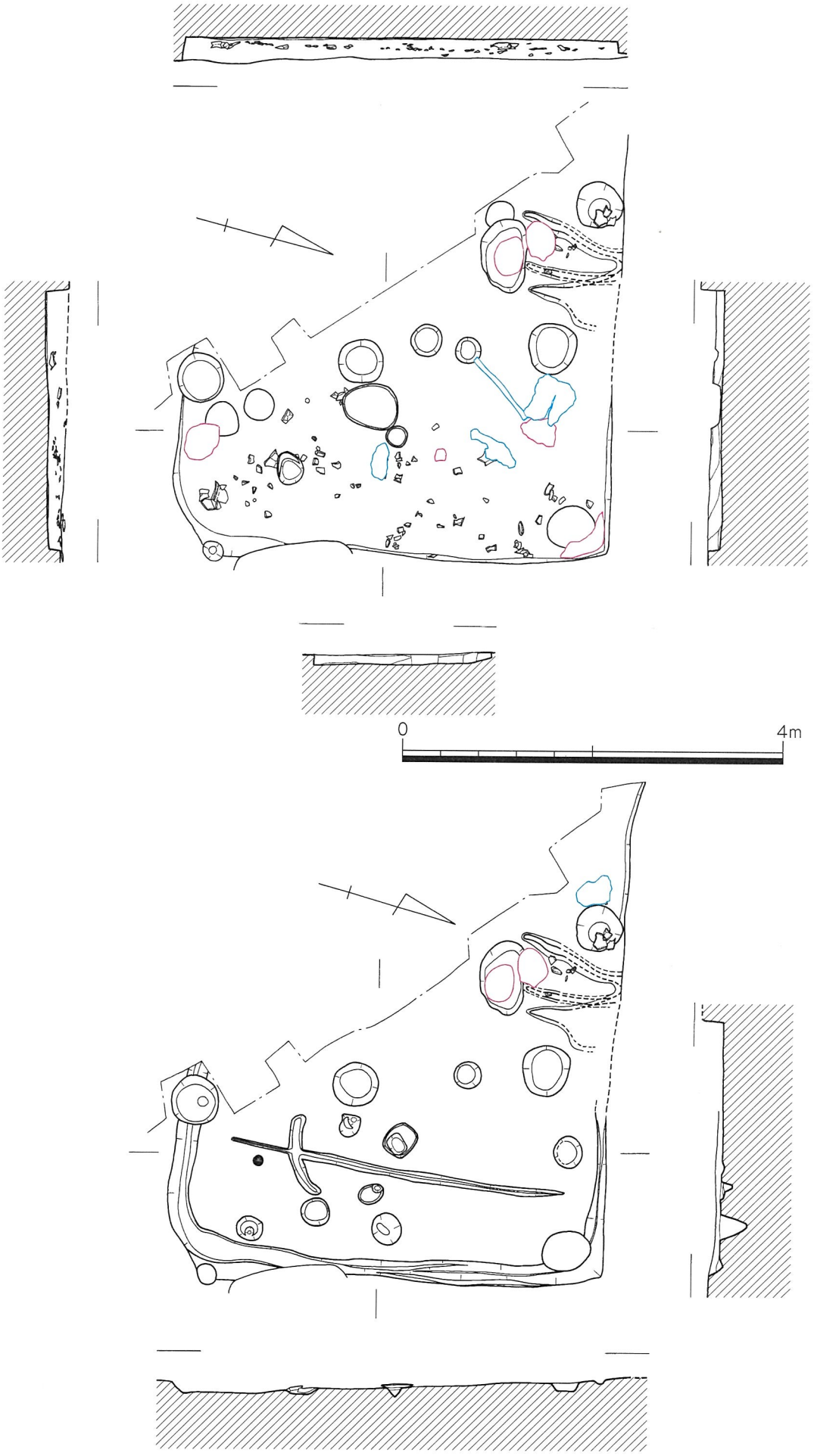
1号竪穴式住居跡カマド

北壁ほぼ中央に造られ、煙道が北側に向かって延びる構造のカマド。カマドの残存状況が悪かったうえに調査者の認識不足によりその多くを破壊してしまい、自責の念に駆られる。初めに、カマドの袖部の検出を行ったところ、第1袖部と第3袖部を検出した。そして、これを袖部として認識し、焚口部の検出を行った。ところが、第1焚口部を検出したところ、焚口部と第3袖部との間に距離があった。また、第1焚口部の南に隣接してある土坑を調査したところ、第2焚口部を確認し、ここで初めて造り直しが行われていて、右袖部を造りかえて再使用していることに気づいた。しかしながら、第３袖部については、その第2使用時において存在している必要がないため、疑問符を付けざるを得ない。第2使用時のカマドの規模は、焚口幅46cm、長さ1.16m、両袖幅62cm（最大）を測る。袖は、炭を含んだ褐色粘土で構築している。支脚は研磨した石を用いており、焚口前面部が赤変していて、袖の補強に石が用いられたと考えられる。煙道は、焚口部から煙出しに向けて緩やかに上がっていく。また、第2袖部には袖石が見られ、やはり、焚口面が赤変している。第1使用時の焚口幅は、赤変硬化面で43cm、掘り方78cmを測る。袖は明褐色粘土を用いている。

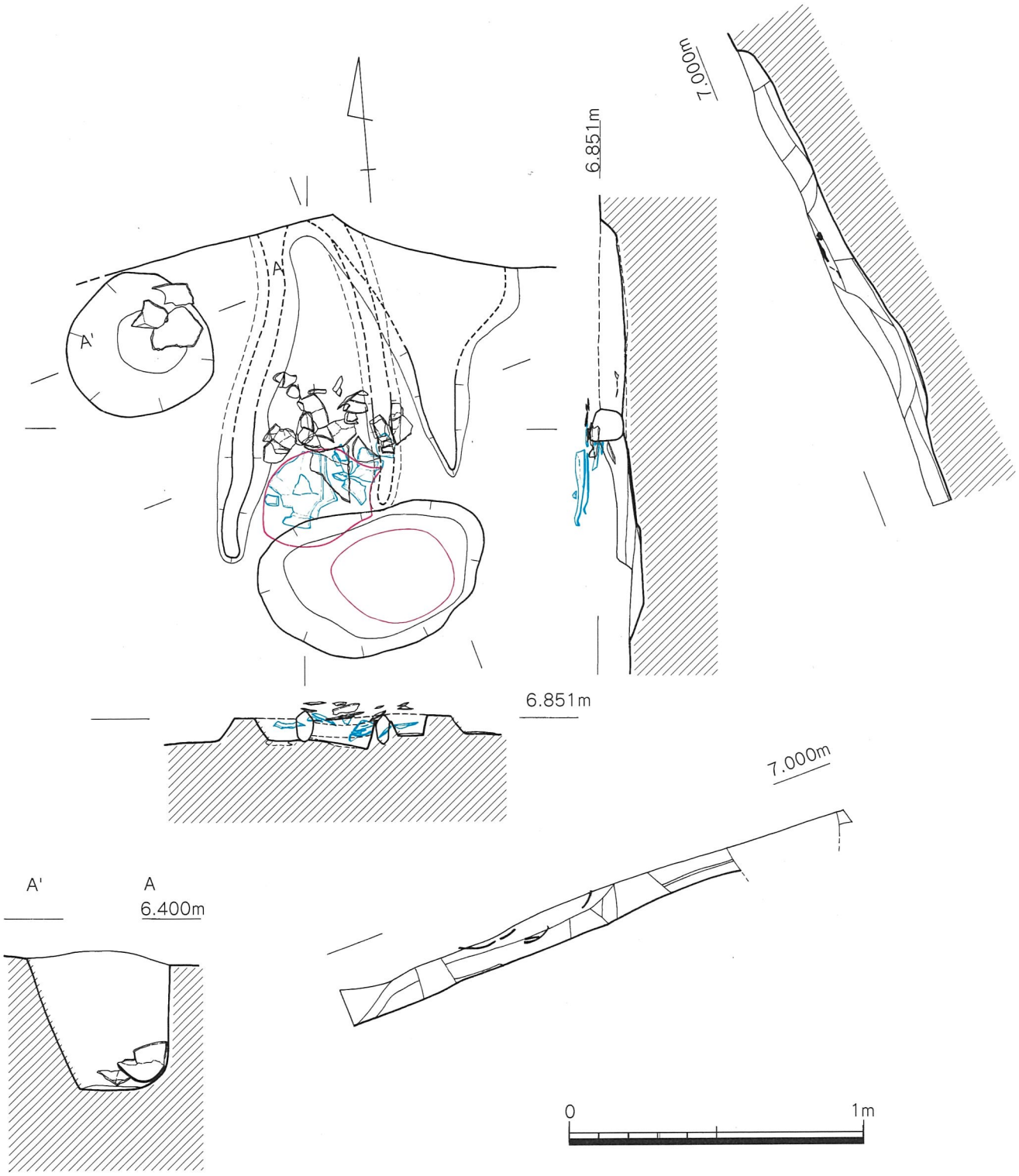
カマドの西隣には、付随するように不整円土坑が確認された。長軸51cm、短軸49cm、深さ48cmを測り、底面から壁面にかけて土師器が接するような状態で検出された。

1号掘立柱建物

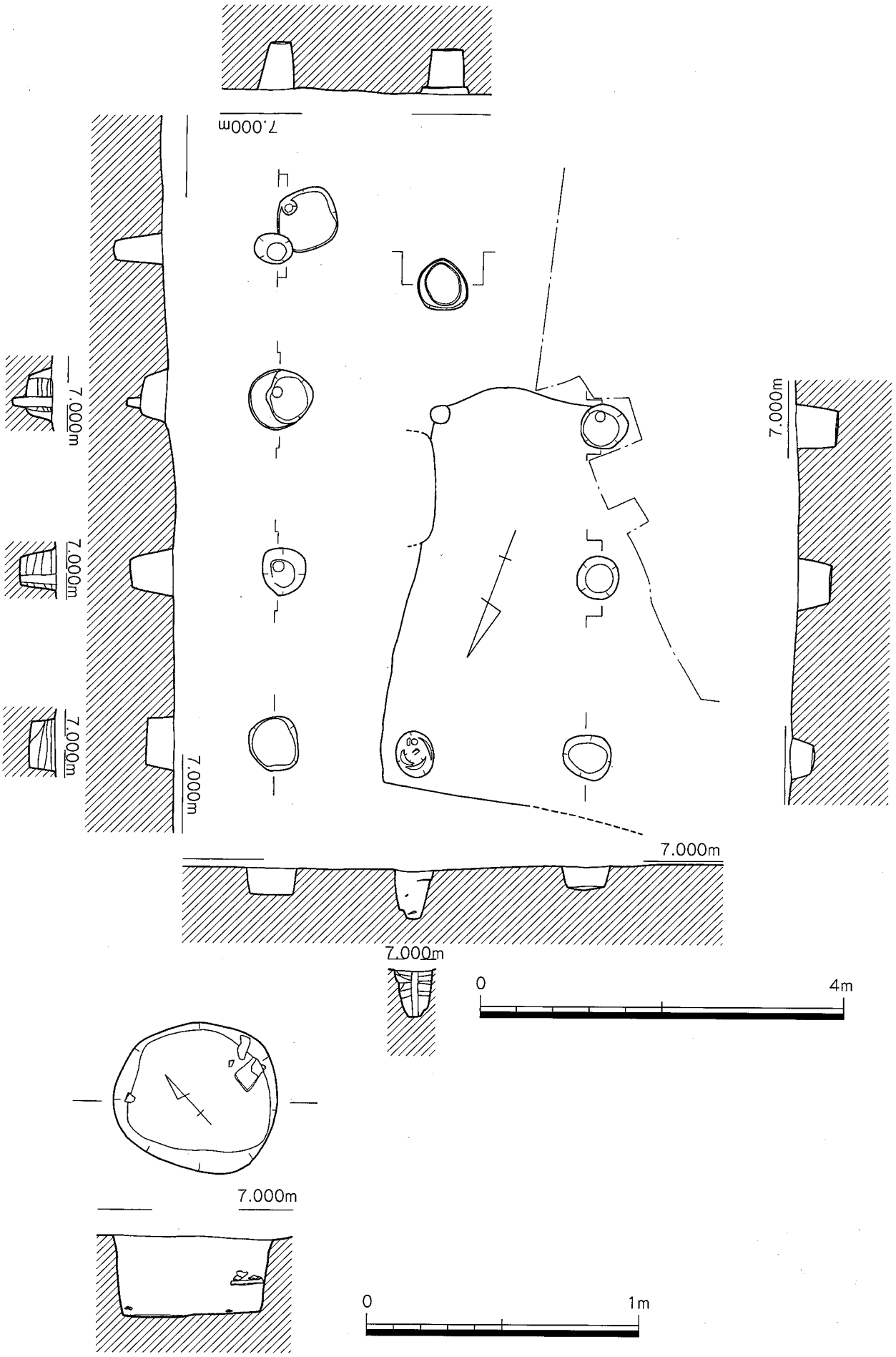
調査区北側中央に位置し、1号竪穴住居を切っている。2間×3間の南北棟建物で、南西隅の柱穴は調査区外に延びていたため確認できなかった。計画方位はN－21°－Eである。梁行は北側で3.429m、南側で1.847m+α、棟行は東側で5.478m、西側で3.696m+αを測る。南側梁行の6号柱穴は、1・4号柱穴間を0°とした場合4・6号柱穴間は79°50′となり、6号柱穴がかなり北側に入っており、直角軸線から大きく外れる。10号柱穴は、当初4号柱穴の抜き取り痕と考えられたが、掘削を行ったところ10号柱穴においても柱痕跡が検出されたため部分的な建て直しが行われたと考えられるが、これも6号柱穴と同様に直角軸線から大きく外れるため、断定できない。柱痕跡はすべての柱穴で確認されたわけではないが、残存している柱痕跡を土層観察したところ、柱穴の掘り方を柱の大きさに対して大きく掘削した後、柱を挿入して版築状に土を固めていることが分かった。柱の深さについては、浅いもので24cm、深いもので54cmとばらつきがある。



第5図



第６図　Ａ区１号竪穴式住居カマド平断面実測図（1/20）



第７図　Ａ区１号掘立柱建物平断面実測図（1/60・1/20）

（4）奈良時代の遺構

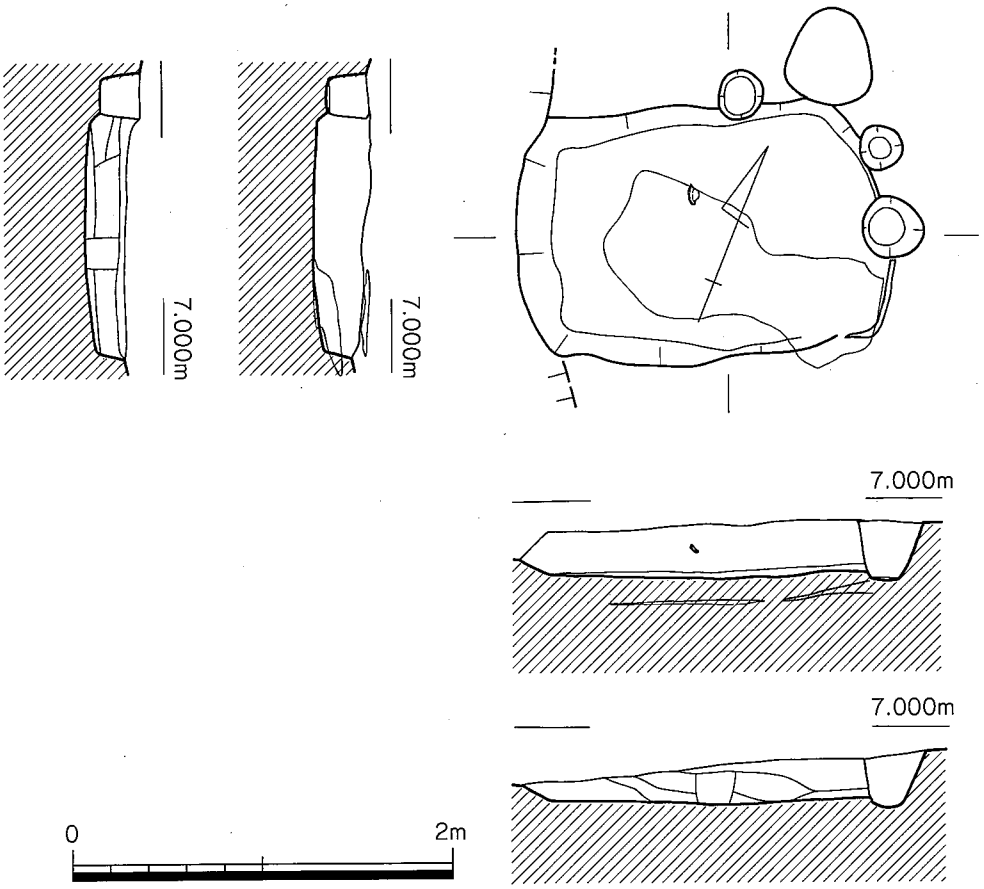
1号土坑

ほぼ調査区中央に位置する長方形プランの土坑で、1号竪穴式住居を切っている。土坑の規模は、長軸1.94m、短軸1.31m、深さ14～26cmを測る。南東側壁上面はよく焼けており、赤変硬化している。また、南東側床面から対角の北西側床面に向けて炭が広がっている。土層観察の結果、最下層である炭層の堆積後、茶灰色粘質土を中心に西側から東側に向けて埋土が流れ込み自然埋没している。出土遺物は、層中位から須恵器・不明土製品などが出土している。1号土坑周辺の包含層からは、鉄滓が出土していることから鍛冶炉周辺の焼土坑の可能性がある。

（5）その他の遺構

ピット

建物としてまとまりを捉えることができなかったピットは全部で　基を数える。押しなべて論じることはできないが、調査区南東壁面土層の観察の結果、ピット群の内の1基が上層の遺物包含層から切り込んでいることが確認できることから、その大部分が世紀を下限として捉えることができるであろう。



第8図　1号火葬土坑平断面実測図（1/40）

（6）出土遺物

本調査において出土した遺物の大部分において磨耗が著しく、器表の調整がわからなってしまうほどであった。これは、埋没過程におけるローリングと風化作用の結果であろう。以下、遺物について詳述する。

1号竪穴式住居

1～10は1号竪穴式住居より出土した遺物である。1～3は山陰系二重口縁壷。1は口縁部～胴中部まで1／4程度残存。口縁は直立し、胴肩部は張らずに丸味を帯びるように落ちる。口縁部の一部と胴中部に黒斑があり、胴中部の黒斑には、横方向の刷毛目の後に縦・斜方向の刷毛目を施しており、器面調整が明瞭に残る。2は口縁部～屈曲部のみ残存。若干外へ開く。3は口縁部～頸上部のみ残存。外へ開くもので厚みが薄い。4・5は山陰系鼓型器台。4は頸部のみ残存して、若干頸部が大きい。風化が著しく調整不明。5は頸部のみ残存。厚みが薄く、小型のものか。6～10は畿内布留系甕。やはり、磨耗が著しく、調整が分かるものは少ない。6は口縁部～胴中部まで1／2程度残存する。口縁端部は丸味を帯び頸部の屈曲も顕著ではない。外面肩上部には縦・斜方向の刷毛目、肩部には一条の波状文と横方向の刷毛目が若干残る。内面頸下部は斜方向のヘラ削りの他、指頭圧痕がわずかに残っている。7は頸部～胴中部まで残存。外面の調整は不明であるが、一条の波状文が確認できる。内面は胴上部に斜方向のヘラ削りを施す。8・9は頸部～胴上部まで残る細片。いずれも調整不明。10は丸味を帯びた底部片。外面には細かい縦・斜方向の刷毛目、内面には横方向の刷毛目を施す。

1号竪穴式住居カマド

11～16は、1号竪穴式住居カマド及びカマド付随土坑からの出土である。11はカマド付随土坑からの出土で、畿内布留系甕。口縁端部を丸く仕上げる。12～14は、カマドからの出土。12は畿内布留系甕の口縁部～胴中部まで残存。口縁外面は、強い横ナデが明瞭に残る。胴上部内面は、斜方向のヘラ削りと指頭圧痕がわずかに残る。13は畿内布留系甕の口縁部のみ残存。磨耗が著しく調整不明。14は布留系直口壷。磨耗が著しく調整不明。15は、カマドの西側で検出した炭下からの出土である。小形鉢で口縁部～頸部まで残存。口縁部は外反するが、外傾がやや強く、口縁部が長くのびる。16はカマドからの出土で畿内布留系甕の頸部～胴上部まで残存している。胴上部内面は、斜方向のヘラ削りと指頭圧痕がわずかに残る。

1号掘立柱建物

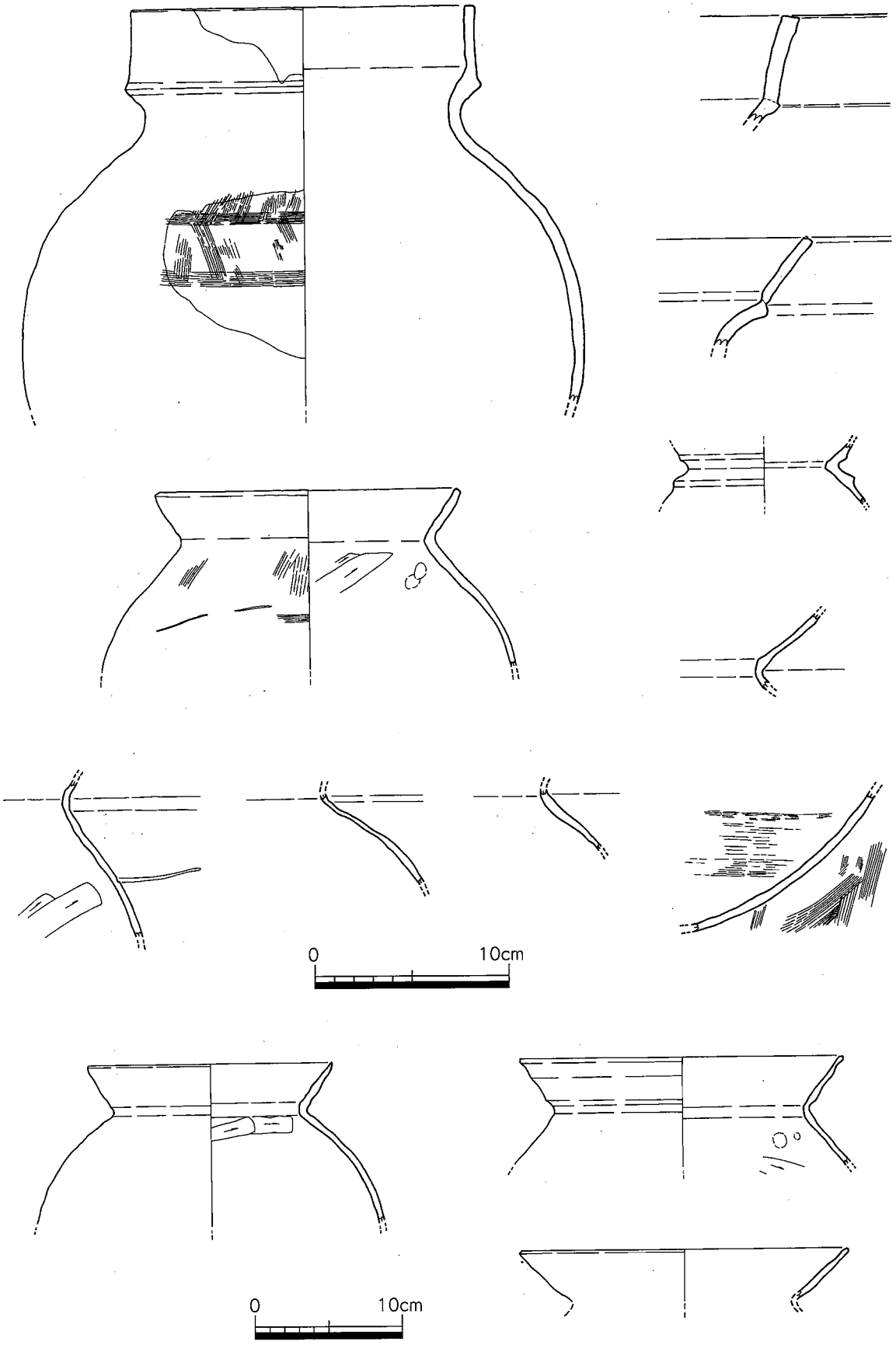
17は4号柱穴からの出土で、山陰系二重口縁壷の口縁部片。口縁部はやや外傾する。18～20は1号柱穴の出土。18・19は山陰系鼓型器。18は頸部～脚部まで残存している。脚部内面は、斜・横方向のヘラ削りを施す。19は頸部のみ残存。20は畿内布留系甕の頸部のみ残存している。

1号土坑

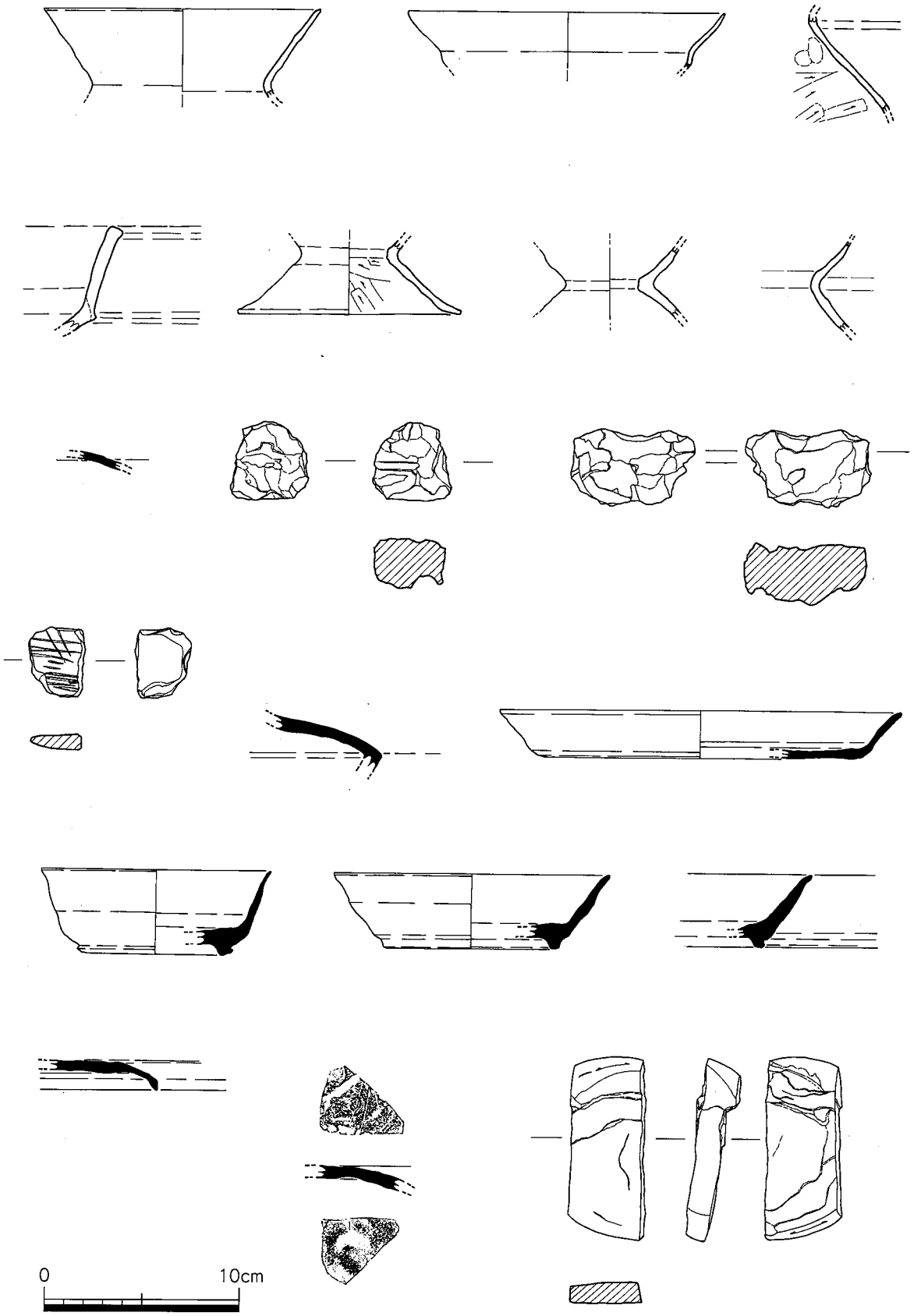
21は須恵器、杯蓋片。22～24は不明土製品。ヘラ状工具痕及び植物繊維痕が残る。

ピット・包含層

25は9号ピットより出土した長頸壺もしくは短頸壺片。26は須恵器・皿片、口縁部～底部1／8程度残存。口径に対して器高が低く、口縁が外反する。27～29は須恵器・高台付椀。27は口縁部～底部まで残存しており、体下部が若干膨らむ。体部内外面は回転ナデ調整を施す。28は口縁部～底部まで残存し、体部が外斜する。29も口縁部～底部まで残存し、高台断面がハの字を描く。30は須恵器・杯蓋。天井部が平らに近くなっている傾向を示す。31も須恵器・杯蓋。天井部外面はヘラ記号を残す。



第９図　Ａ区１号住居・カマド出土土器実測図（1/3・●は1/4）

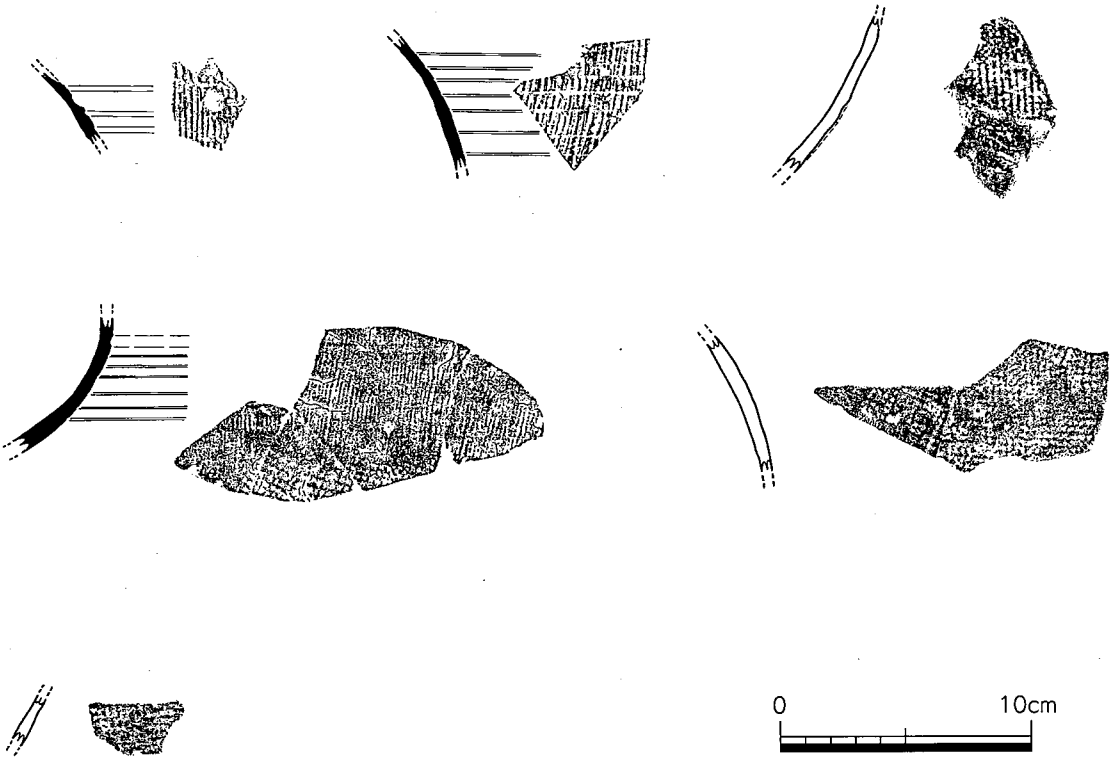


第10図　A区１号住居カマド・１号掘立柱建物・ピット・包含層出土土器実測図（1/3）

瓦質土器・陶質土器

本調査において出土した朝鮮半島系土器は　点を数える。１号竪穴住居跡・1号掘立柱建物・13号ピットの埋土中及び床面より出土しており、なかには削平後の再堆積と考えられるものも存在する。以下半島系土器について詳述したい。

32～34は１号竪穴住居跡から出土している。32は青灰色を呈する陶質土器。外面は縦方向の平行タタキの後水平方向の沈線を巡らし、内面は横ナデが残る。33は暗青灰色を呈する陶質土器。短頸壺肩部片か。外面は縄蓆文タタキの後水平方向の沈線を密に巡らし、内面は横ナデを施す。34は黄灰色を呈する瓦質土器。磨耗が著しく、外面の一部が剥離している。外面の調整は格子目タタキを施し、内面は磨耗が著しく調整不明。35・36は１号掘立柱建物から出土している。35は1号柱穴出土片と2号柱穴出土片が接合しており、削平後の再堆積であろう。外面白青色、内面灰白色を呈し、瓦質に近い陶質土器。短頸壺胴部片か。外面上部は細かい平行タタキの後に水平方向の沈線を蜜に巡らし、外面下部は格子目タタキを施す。36は2号柱穴からの出土で黄灰色を呈する瓦質土器。外面の調整は格子目タタキを施す。磨耗が著しく調整不明瞭。37は13号ピットからの出土で黄灰色を呈する瓦質土器。磨耗が著しく調整不明瞭。外面は格子目タタキを施す。



第11図　A区１号住居・１号掘立柱建物出土瓦質土器・陶質土器実測図（1/3）

Ⅳ．まとめ

今回の調査では、調査対象面積が狭く、旧地形を失うほどの道路・宅地造成工事が行われていたことことから、遺構の残存には悲観的であったが、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物1棟、土坑1基、ピットを検出するに至った。以下、簡単ではあるが特記すべき事項のみまとめることとしたい。

調査した1号竪穴住居跡は、貼床直上や埋土に含まれる出土遺物から、柳田康雄氏（1982）の編年によるⅡｃ期には埋没している。また、1号掘立柱建物は1号竪穴住居跡を切っていることから、それを下限として捉えることができるものの、柱穴埋土が集落遺跡の削平後の再堆積と考えられるため時期の断定は困難である。

1号竪穴住居跡から造り付けカマド、半島系土器、1号掘立柱建物からも半島系土器が出土するなど外来的要素が確認できることは特筆に値する。造り付けカマドは住居壁中央に位置し壁に直行して造られており、西神町遺跡第12次調査の6・42号竪穴住居跡のほか、西神町遺跡第13次調査48・52号竪穴住居跡などが類例に挙げられる。時期は、Ⅰａ期以前からかまどの敷設が見られ、Ⅱａ~ｂ期が中心となり、本例よりも古く位置付けられる。住居壁中央に位置するカマドについては、第13次調査48号竪穴式住居跡で煙道が屋外まで延び、煙道から屋外にかけて粘土を厚く積み重ねている構造のものが検出されており、この構造のものは塚堂遺跡Ｄ－13号例（5世紀前半）において確認されるが、このタイプのカマドは、西新町遺跡においても検出例は少なく、資料不足の感は否めず、５世紀に見られるカマドの系譜については、資料の増加を待ちたい。一方、三雲遺跡や御床松原遺跡では、５世紀前半にならないとカマドが普及せず、4世紀は炉が中心を成している。カマドの受容のあり方において注目される。瓦質土器は、外面格子目タタキを施し、黄灰色を呈しており、後期瓦質土器でも新しい部類に入るものと考えられる。陶質土器は、外面は縦方向の平行タタキもしくは縄蓆文タタキの後、水平方向の沈線を巡らす。短頸壺と考えられるが、半島系土器はすべて細片で器種の同定は難しい。

糸島地域では、楽浪系土器が王都と考えられる三雲遺跡番上・サキゾノ地区で出土しているほか、深江井牟田遺跡、石崎曲り田遺跡、浦志遺跡Ａ地点、浦志井尻遺跡、御床松原遺跡など引津湾・加布里湾、それぞれの最深部および縁辺部から出土しており、重要な港が形成される。（角2000）古墳時代前期に入ると西新町遺跡、博多遺跡群、箱崎遺跡などの集落遺跡から、博多湾を中心とする交易機構に集約、成立しており交易の中心が次第に博多湾に移っていくとされる。（白井克也2000）また、この時期、博多湾岸に見られる砂丘遺跡を「市」と評価し、地域間交渉、社会関係の手がかりにしようとしており、（久住1999）そのような遺跡に陶質土器が出土していることは注目される。（白井克也2000）

一方、糸島地域では三雲遺跡、御床松原遺跡、浦志井尻遺跡、前原西町遺跡、東下田遺跡の集落から瓦質土器・陶質土器が出土している。引き続き体制が維持されるのみならず、集落が湾縁辺部や河川流域に広がりを見せ、展開していると考えられるが、今後の引津湾・加布里湾の最深部および縁辺部の調査を待って改めて検討したい。

2．B区の調査

（1）調査の概要

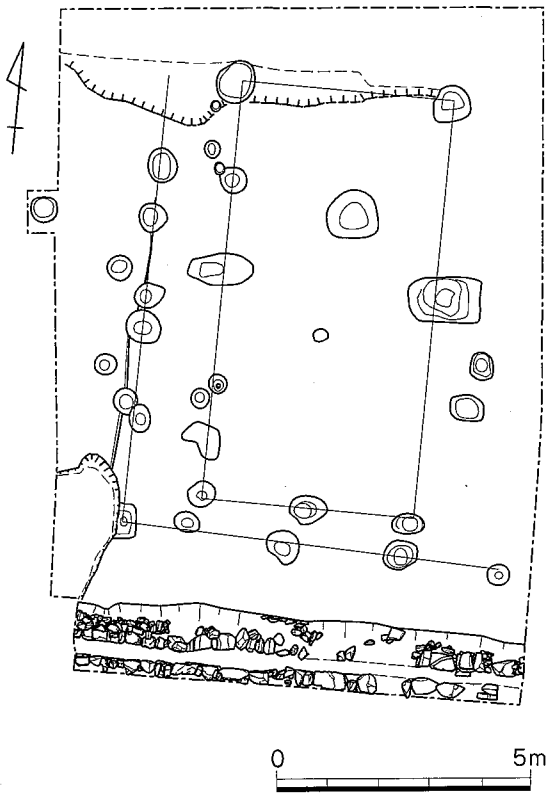
前原西町遺跡第2次調査のB地区は、かつて唐津街道の前原宿であった現在の前原商店街に南面している。平成11年度に行った前原西町遺跡第1次調査の地区は旧街道に沿って東方向に90mほど行った場所にある。

調査区は道路の拡幅部分に設定し、東西幅約9m、長さ20mで、南側から、近世の掘立柱建物1棟と石組みの溝1条が検出されている（第12図）。

（2）遺構

近世溝（第13図）

溝は旧唐津街道に接して東西方向に掘削されており、幅約30㎝、深さ約40㎝で、約9mの調査区東西幅全域に渡って検出された。両側壁は、石積みによって護岸されており、底は地山削り出しのままで石敷きはない。側壁は、中央部分から東側にかけて崩落のため依存状況は悪く、西側では扁平な切石の長側辺または方形の石の比較的平坦な面を内側に向け、三段から一段積みにし、東側では西側よりも比較的大型の石を積んでいるのが確認された。裏込めは10～20㎝大の小型の石を用いており、側壁の間隙には大粒の砂礫を詰めていた。



第12図　B区 遺構全体図（1/150）

近世掘立柱建物（第14図）

掘立柱建物は、溝から約1m離れた北側に建てられている。西と南面に庇を巡らしており、東側については調査区外のため確認できなかった。

（3）出土遺物

磁器碗（第15・16図）

1は端反碗で、外面はよろけ縞文、内面は雷文。

2は丸形碗で、外面に二重の網目文を施す。

3は端反碗で、外面に二重格子文とよろけ縞文。

4は端反碗で、外面の体部に三重格子文、口縁部付近に蝶の文様、内面の口縁部付近に蝶の文様を施している。

5は半球形碗で、外面に花文を施す

6は丸形碗で、外面に笹文を施す。

7は端反碗で、外面に梅の文様を施す。

8は外面に草文を施す。

9は端反碗で、外面に花唐草文、内面の口縁部に縁文描き、見込み部分に半菊文を巡らす。

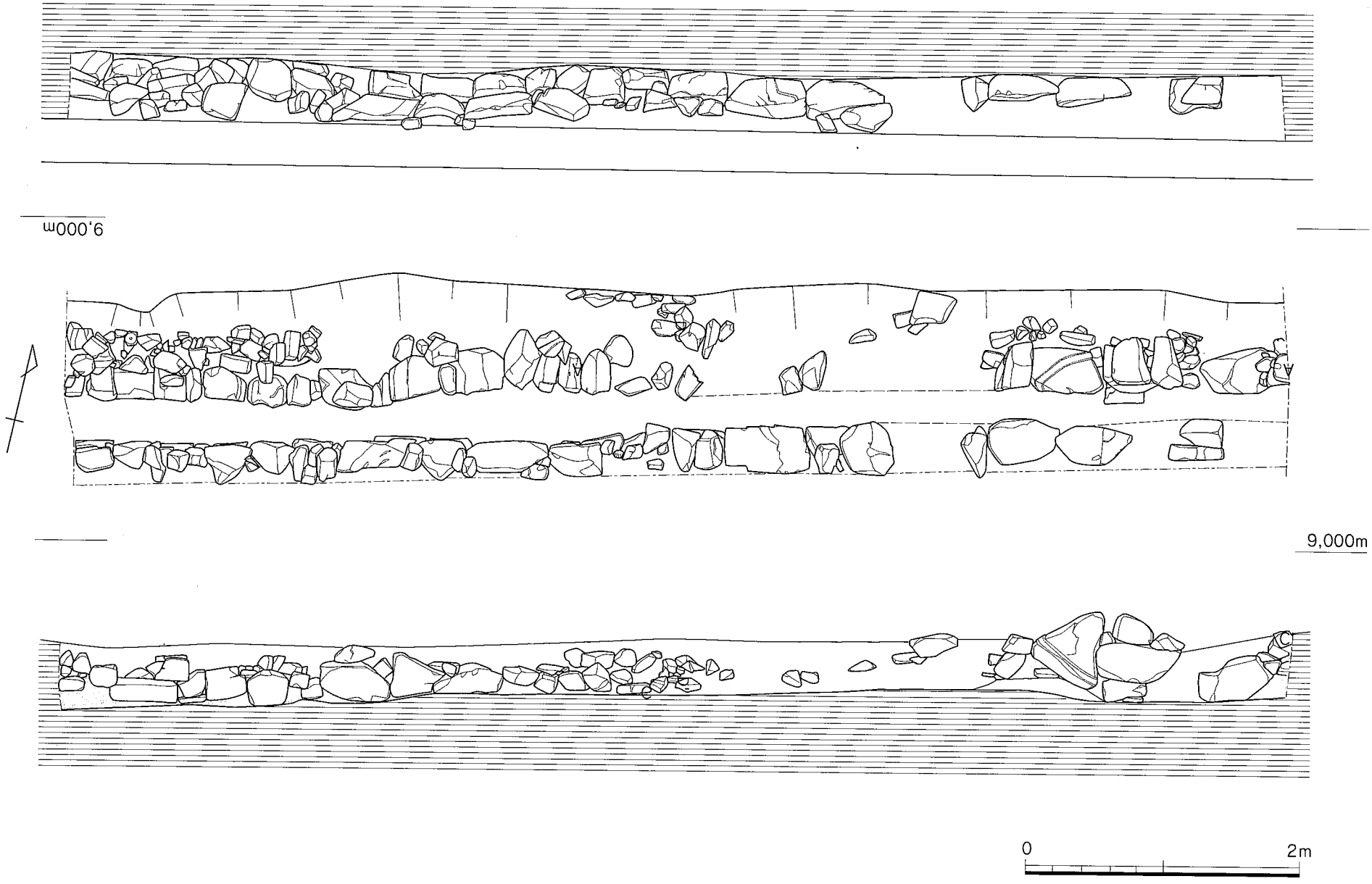
10は端反碗で、外面に梅と竹の文様を、内面は見込み部分に一重圏線を引き、菊と竹の文様を巡らす。

11は筒形碗で、外面に型紙摺による竹文を施す。

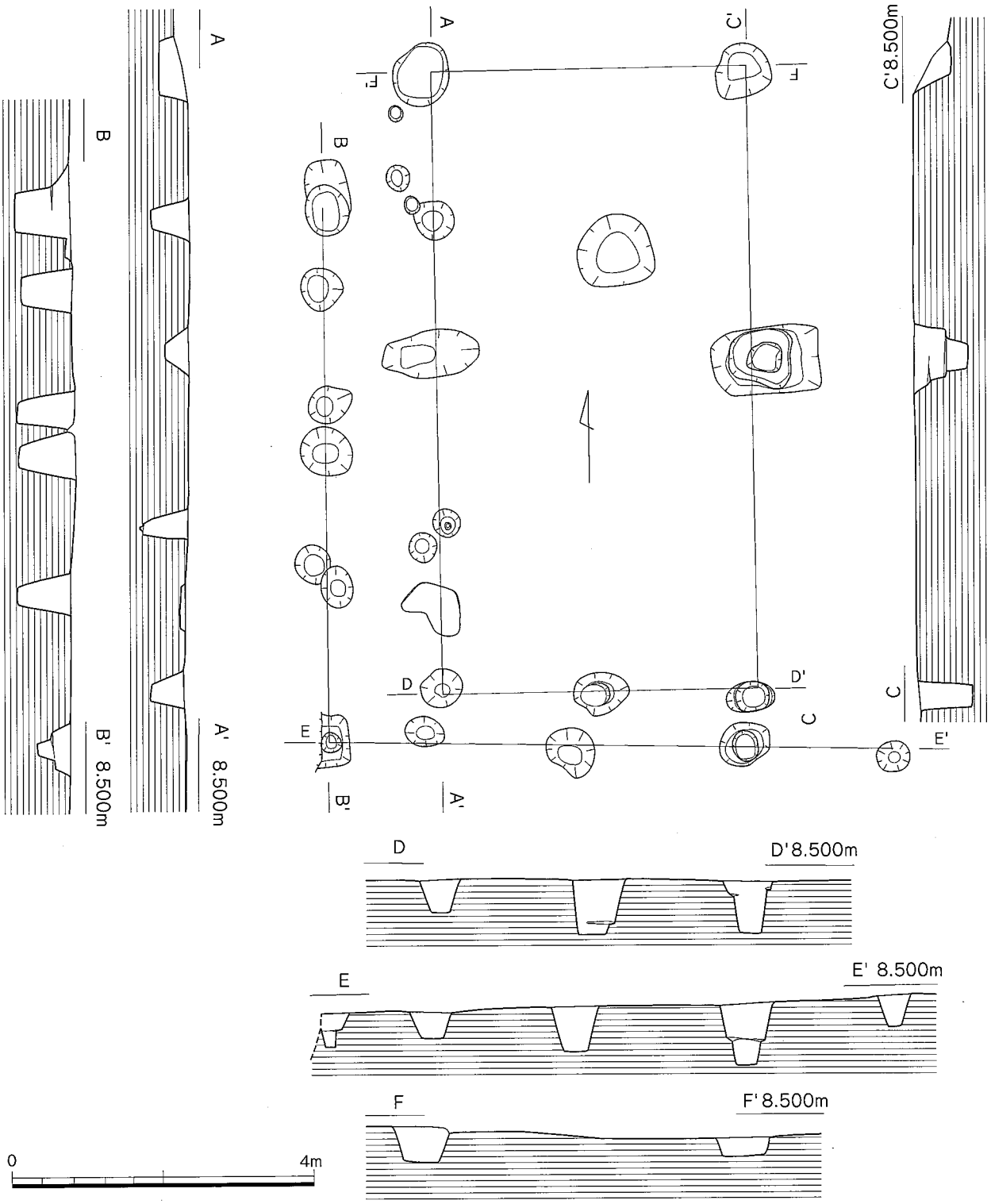
12は端反碗で、外面に格子文とよろけ縞文、高台部分に二重圏線を、内面見込み部分に一重圏線を引いた内側に銘を施す。

13は外面に粗く青磁釉を施し、内面と高台内に透明釉を掛ける。見込み部分には二重圏線を引き、コンニャク印判五弁花を、高台内には渦福の銘を施す。

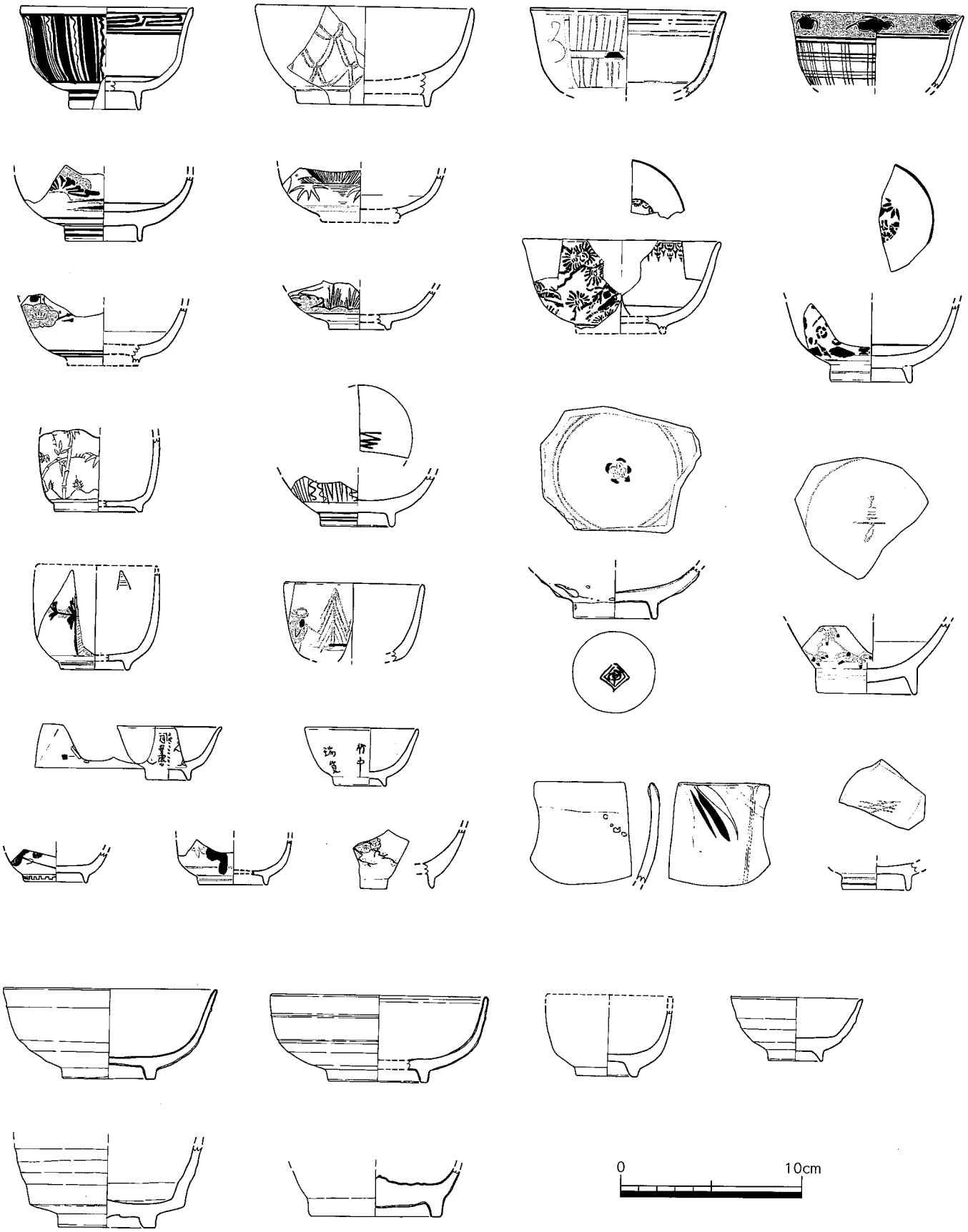
14は広東碗で外面に唐草文、見込み部分に一重圏



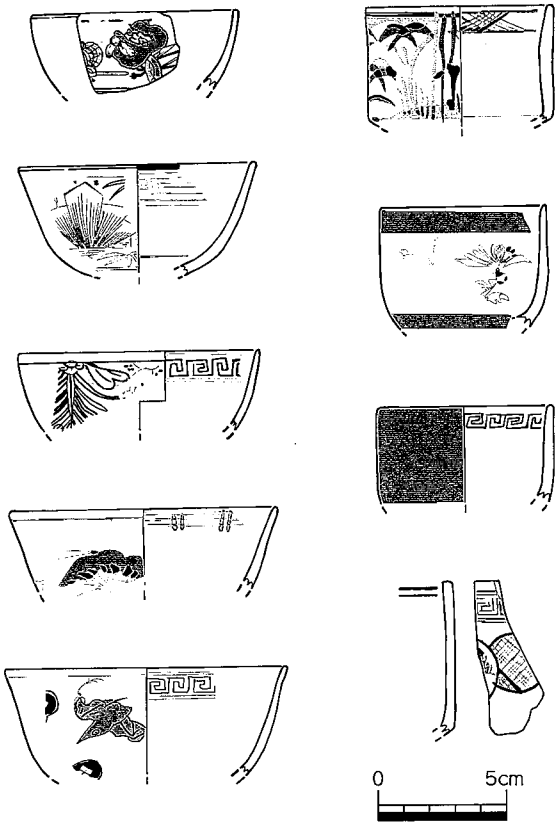
第13図　B区 近世溝実測図（1/40）



第14図　B区 近世掘立柱建物実測図（1/80）



第15図　近世溝出土遺物２（1/3）



第16図　近世溝出土遺物３（1/3）

線を引き、くずれた寿字文を施す。

15は筒形碗で、外面に松文を口縁部内側に雷文。

16は半球形碗で、外面に海浜風景と釣り竿を担いだ人物を描く。

17は小杯で「地上　月星へ隈ル□□」の文字を書き、網と猪口の絵を描く。

18は小杯で「林中　□稿質」の文字が入る。

19は高台外面に櫛歯文を施し、体部に唐草文らしき文様を描く。

20は筒形碗で、外面に唐草文を施している。

21は小杯で、外面に色絵で菊唐草文を描く。

22は見込み部分に斜格子文を施している。

30は丸形碗で、外面に色絵で型紙摺による天狗と笛、太鼓の文様を描いている。

31は筒形碗で、外面に草文、内面口縁部に斜格子文を施す。

32は端反碗で、外面に笹文、口縁内側には雷文。

33は筒形碗で、外面に宝文と鳥の文様を描く。

34は丸形碗で、外面に藤の文様、口縁内側に雷文を施す。

35は端反碗で、外面に扇文、口縁内側に二重格子文を施している。

36は筒形碗で、内面口縁部に雷文を施している。

37は端反碗で、外面に鳥文と四菱文を配し、口縁内側に雷文を配している。

38は筒丸形碗で外面に体部に丸文と口縁部に雷文を施す。

陶器碗（第15図）

23は外面に灰釉を施し、葉を藁灰釉、花弁を鉄釉で描く。

24は内外面に灰釉を施し、畳付の釉を剥ぎ、見込みは蛇の目に釉を剥ぐ。

25は内外面に灰釉を施し、畳付の釉を剥ぎ、見込みは蛇の目に釉を剥ぐ。体部に2本の突帯条の高まりを削り出す。

26は天目の小杯で畳付の釉は剥いでいる。

27は内外面ともに灰釉を施し、畳付は釉を剥ぐ。

28は半筒茶碗で、胴部は高台から斜め上方に向けて延び、胴部を二段に締めている。内外に灰釉を施し、高台部は露胎としている。

29は外面に銅釉、内面に藁灰釉を施し、畳付の釉を剥いでいる。

磁器皿（第17図）

39は内面に青波、檜垣、花詰文を巡らし、内側に松竹、梅文を配置する。外面には花唐草文と思われる文様を施す。高台内は蛇の目釉剥ぎを行っており、明治から大正にかけての時期に属するものと考えられる。

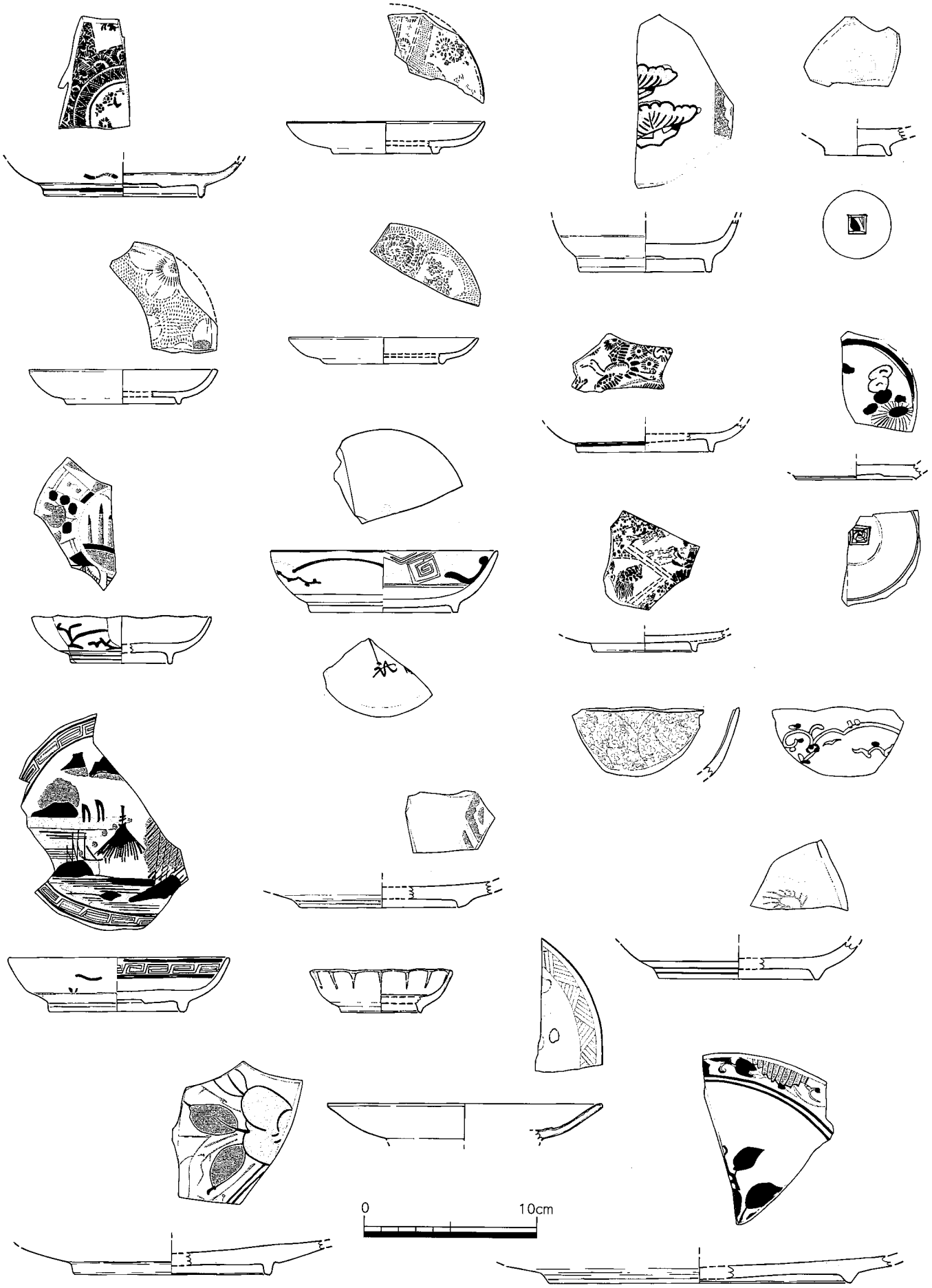
40は内面に菊文を描く。

41は内面に梅文を描く。

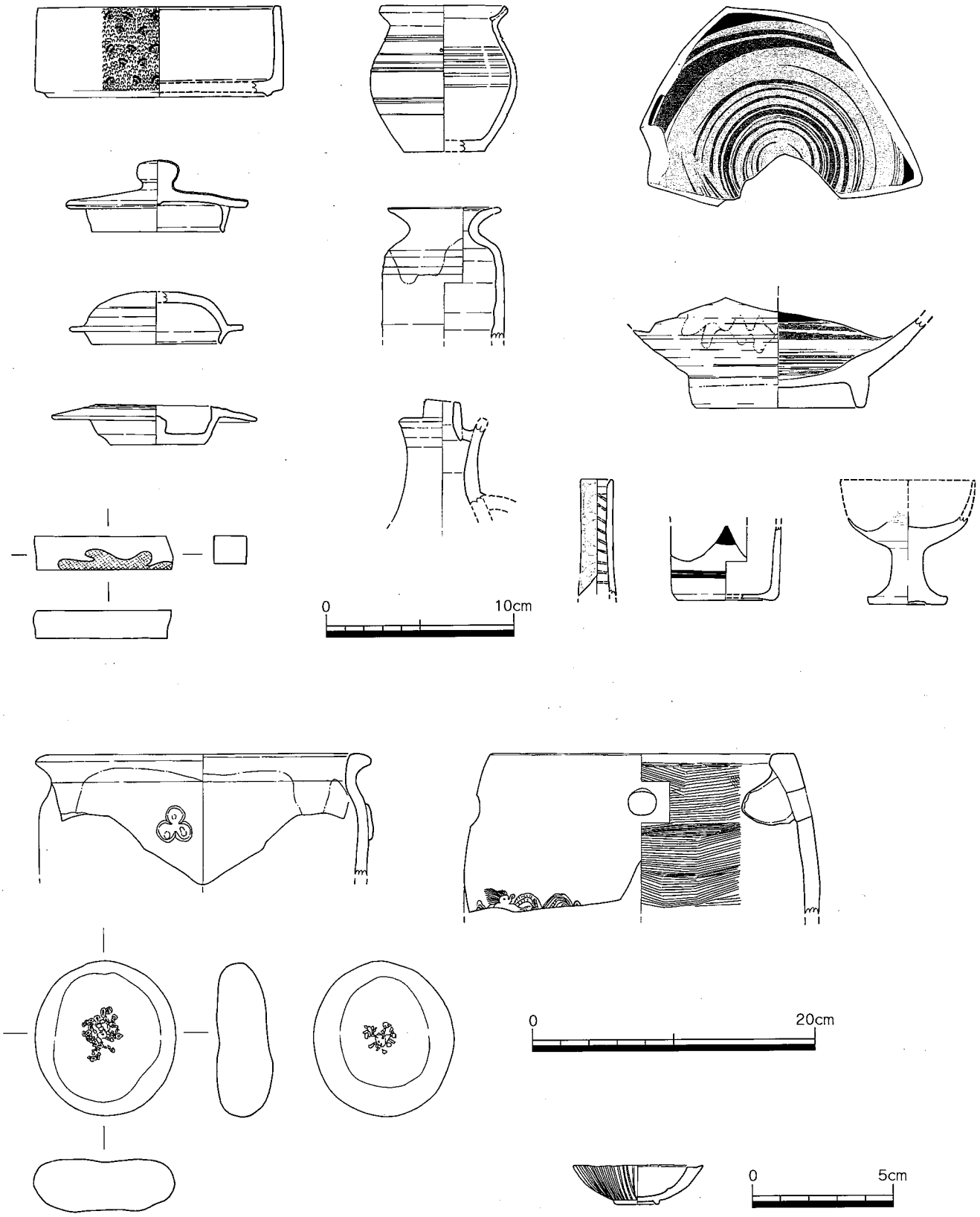
42は内面に藤と草花の文様を描く。

43は見込み部分に松、側面に花の文様を描き、口縁部は輪花、高台は蛇の目凹形とする。

44は内面にコンニャク印判五弁花を、高台内に銘



第17図　近世溝出土遺物１（1/3）



第18図　近世溝出土遺物４（1/2・1/3・1/4）

を施す。

45は内面に型紙摺で鶴と菊の文様を配する。

46は内面に型紙摺で亀と鳥、草花を描く。

47は高台を蛇の目凹形とし、渦福の銘、内面に松の文様を配する。

48は内面に芙蓉手文、外面に唐草文を施す。

49は内側面に雷文と雲文を、見込みにコンニャク印判花文、外面に唐草文を高台内に一重圏線と銘。

50は外面に蔓唐草文、内面に唐草文を施す。

51は蛇の目凹形高台皿で、波状口縁である。内面には中央に東屋を配する海浜風景文を描き、口縁部に雷文、外面に唐草文を施す。

52は内側面に花文を巡らす。

53は白磁の輪花小皿である。

54は内面に草花文を描く。

55は内側面に檜垣を巡らす。

56は内面に花文を描く。

57は内側面に唐草文を、見込みに草花文を施す。

その他の陶磁器（第18図）

58は段重で外面にみじん唐草文を施す。幕末から明治期のものと思われる。

59は蓋で扁平な円形の摘みを持ち、銅釉を施したのちに藁灰釉を掛ける。

60は白磁の蓋で摘み部分は失われている。

61は陶器の蓋で宝珠摘みを貼り付け、上面にのみ鉄釉を施している。底部は糸きりを行う。

62は素焼きの小壺で、体部に数条の沈線を施し、中央部やや上寄りに、1ヶ所小さい点を穿つ。

63は瓶で、全体に鉄釉を施したのち、口縁部に藁灰釉を施す。

64は油差しで、注口は斜めに切り、垂れた油を中に戻す穴が孔けられている。把手は失われているが、痕跡が遺存しており、横についていたものと思われる。釉薬は鉄釉を施す。

65は陶器の鉢で、内外面に鉄釉を施し、内面はこれに白化粧土を掛け、刷毛目文様を描いたのち透明釉を施している。高台は露胎としている。

66は鶴首瓶の頸部から口縁部にかけてで、ほぼ直立し、たこ唐草文が描かれる。

67は猪口で、外面に丸文が描かれている。

68は仏飯器で、外面に文様は施されるが詳細は不明で、花文と思われる。

69は文鎮で裏面は二次的に研磨された痕跡がみられる。

70は外面に3つの円形の浮文を付け、褐釉を施した後に口縁部付近に藁灰釉を掛けている。

71は瓦質の火鉢と思われるもので、体部上面に丸い穴を穿ち、内部に耳をつける。外面には龍を陰刻し、内面は刷毛状の工具で調整を行う。

73は白磁の紅皿である。

その他の遺物（第18図、図版18-3）

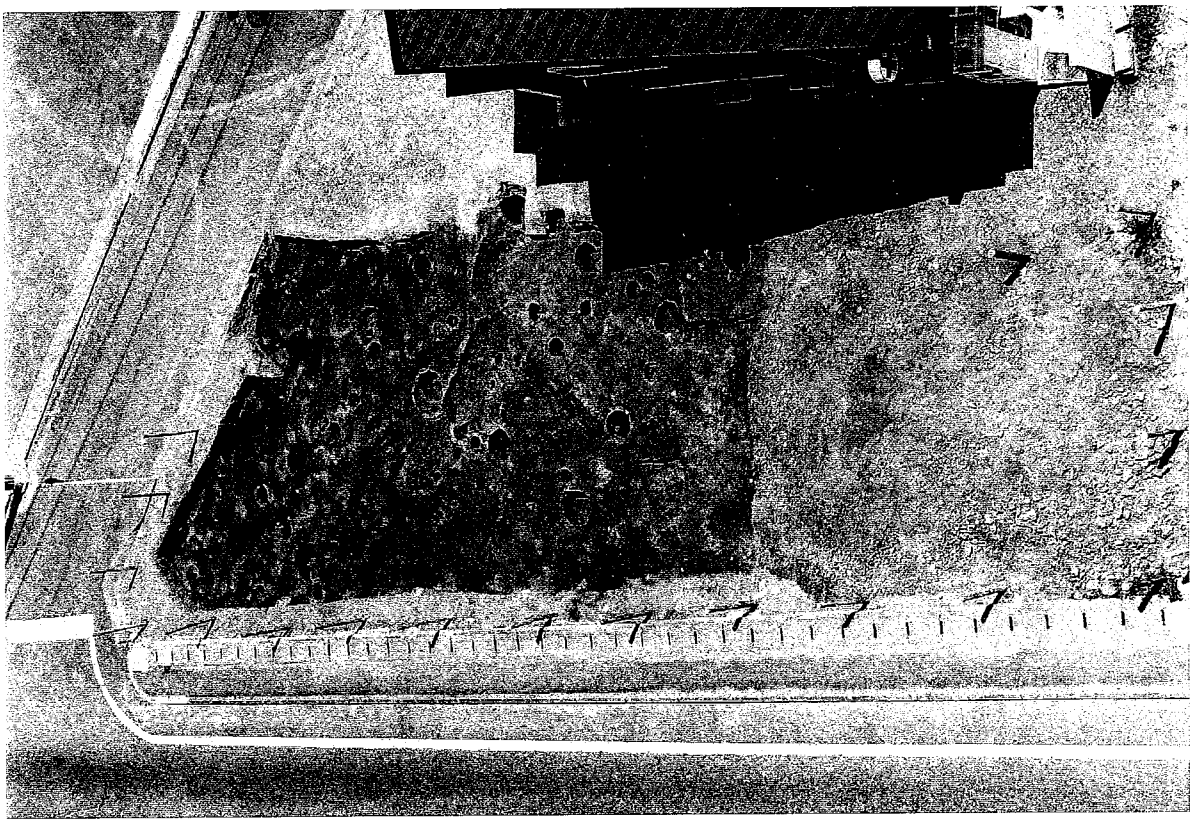
72はすり石状の石製品で、両面とも中央がくぼむ。

図版18-3は瓦で、試掘中に遺構面の上部から出土した。外面に布目のタタキ痕を残す。古代のものと考えられるが、他に当該期の遺物は出土しておらず、遺構も存在しないため位置付けについては不明である。

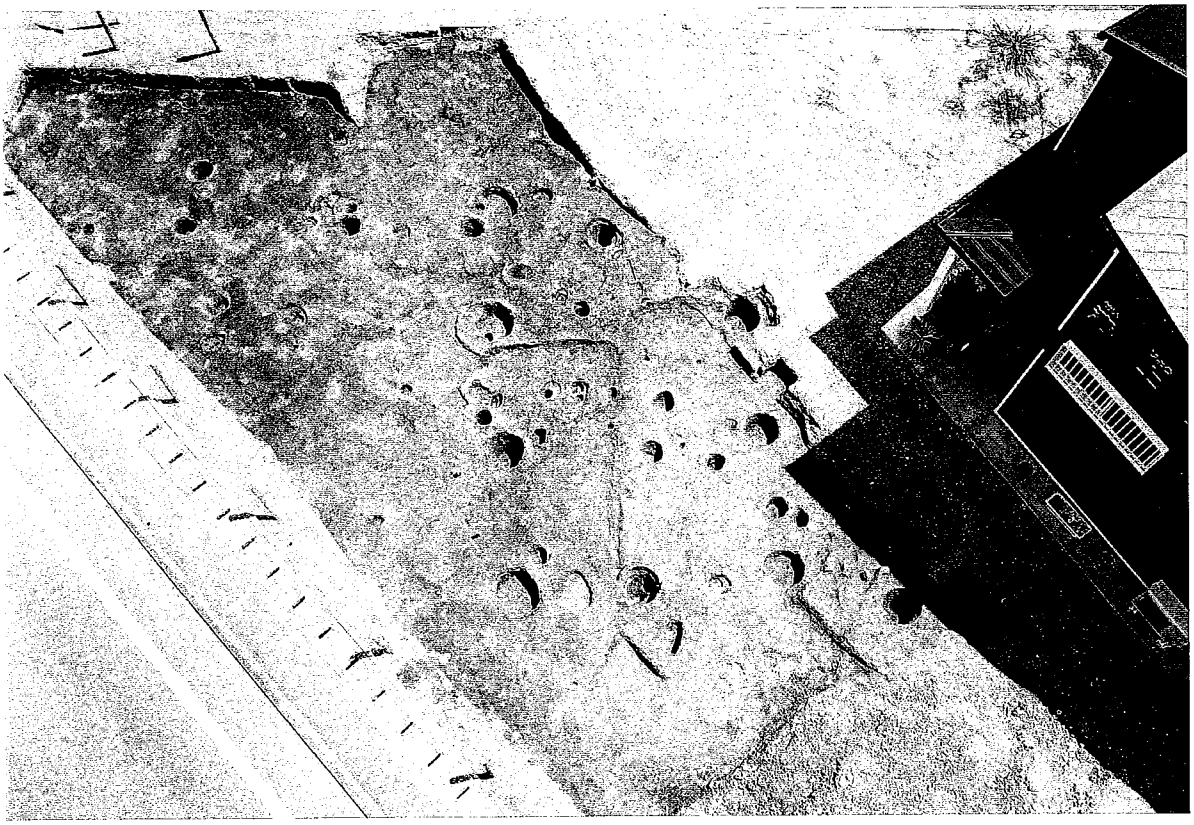
（4）おわりに

今回の調査では石組みの溝と掘立柱建物が検出された。以下、遺構の時期と性格について簡単に述べたい。時期は、出土遺物から幕末から明治期に属すると考えられる。性格は、掘立柱建物については明確ではないが、石組みの溝は検出状況から東西の調査区外に伸び続けていることが想定され、旧街道に沿って掘削されていることもあり、側溝等の役割を持っていた可能性がある。しかしながら、当調査区以外での前原宿における石組み溝の検出例は未だなく、断定に足る段階ではないので今後の調査での検出を待ちたい。

図　　版

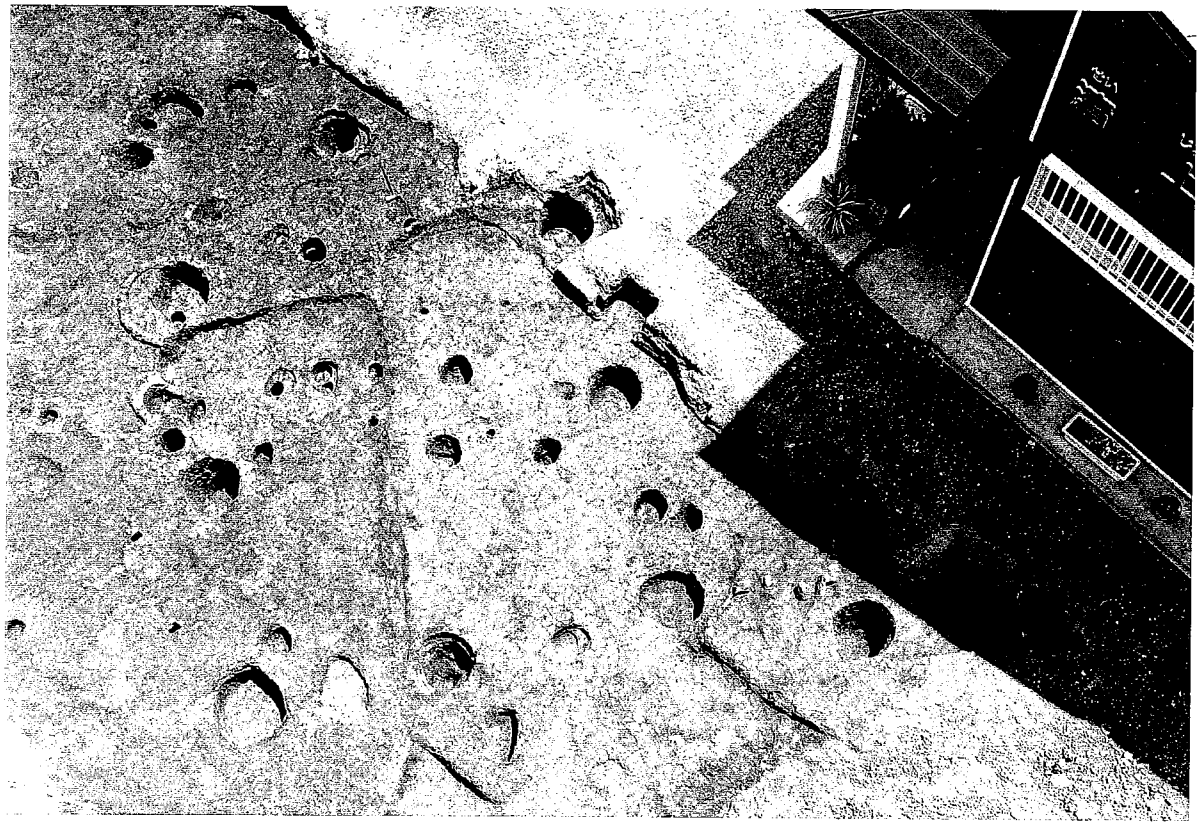


①A区全景写真（北から）

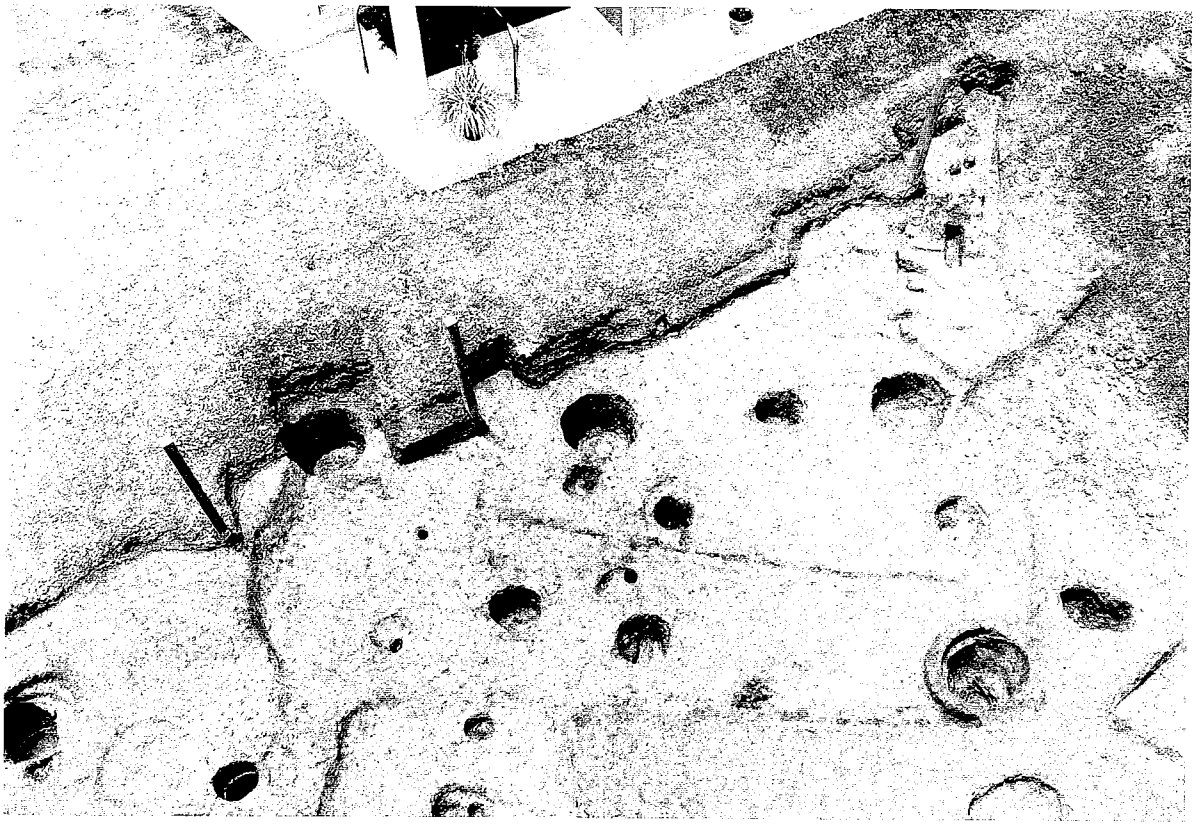


②A区調査範囲全体写真（北から）

図版２

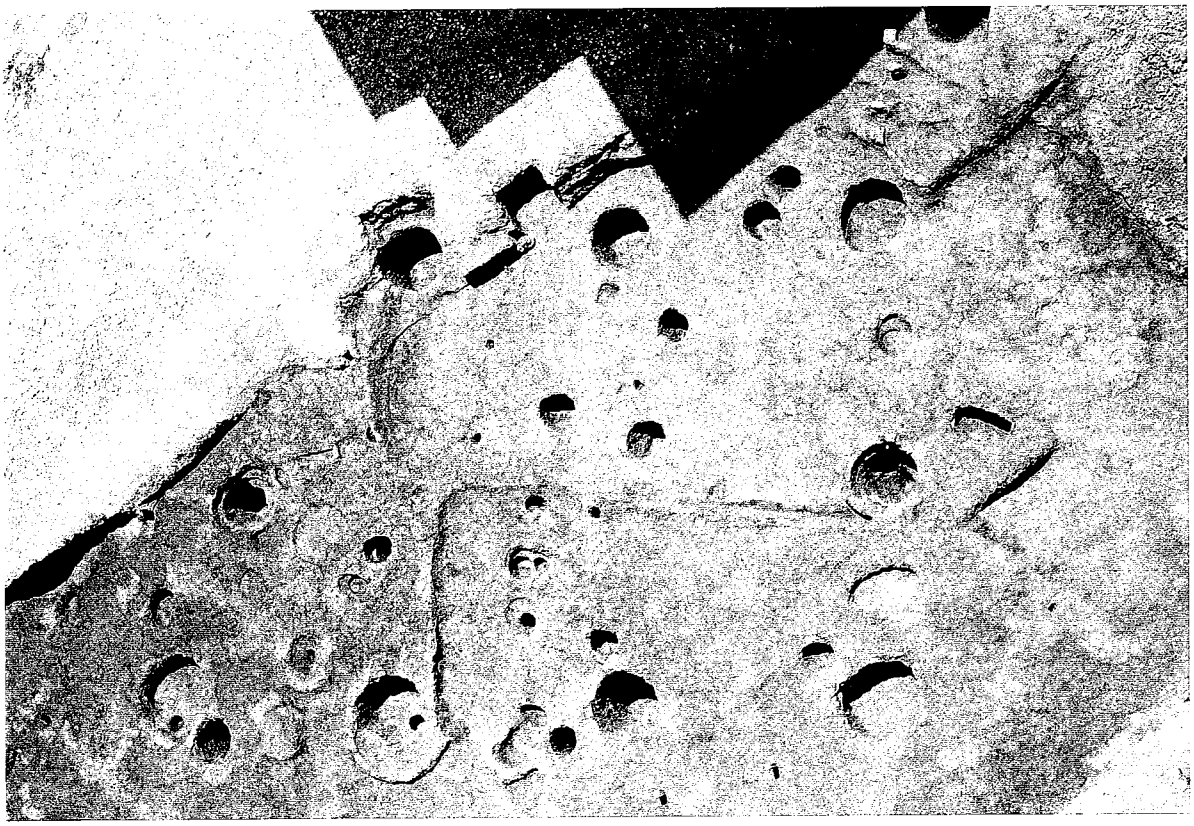


①１号竪穴住居跡・１号掘立柱建物全体写真（北から）



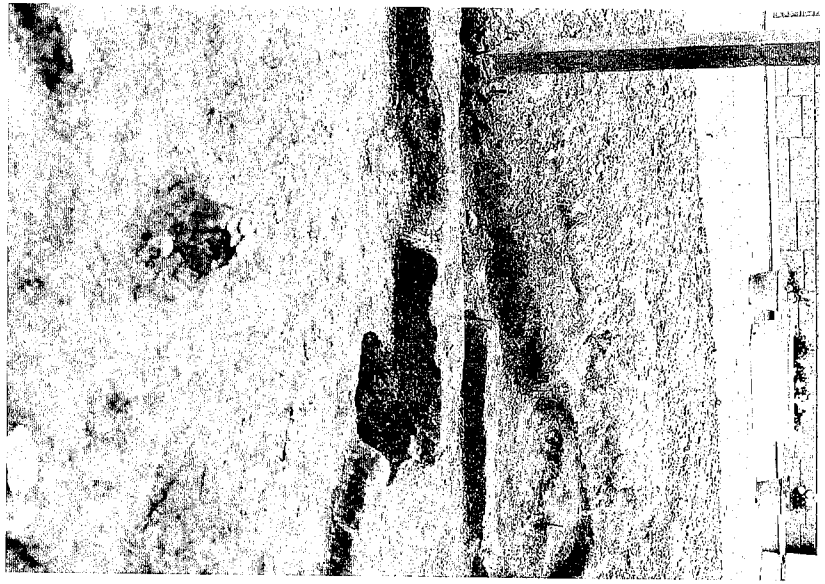
②１号竪穴式住居完掘状況（東から）

①１号竪穴式住居貼床状況（東から）



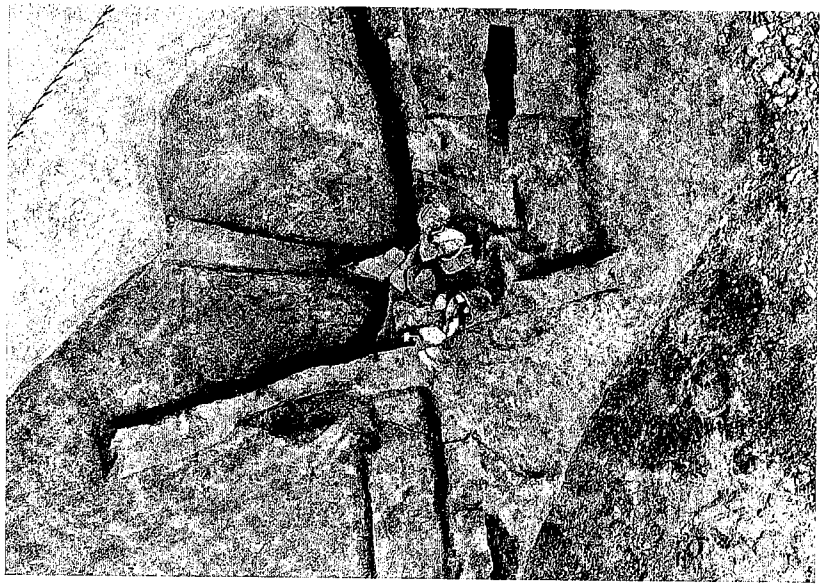
②１号掘立柱建物（北から）

図版４

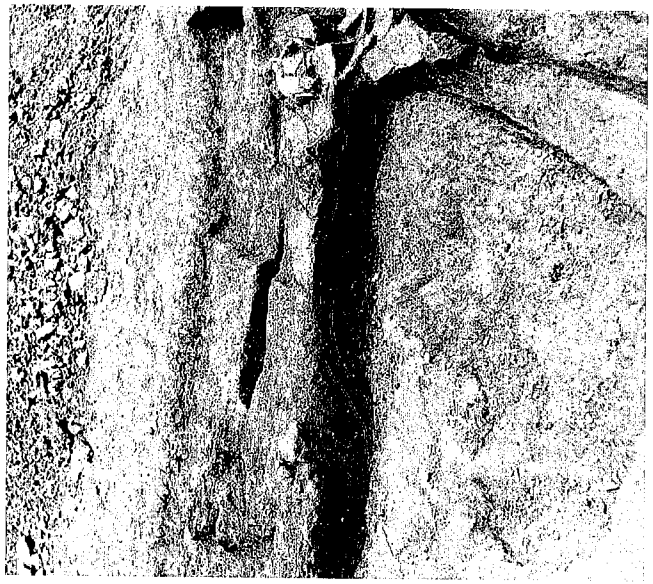


①１号竪穴式住居北側土層断面状況（東から）

②１号竪穴式住居西側土層断面状況（北から）



③カマド土器出土状況（南から）



④カマド西側土層断面状況（南から）

図版5

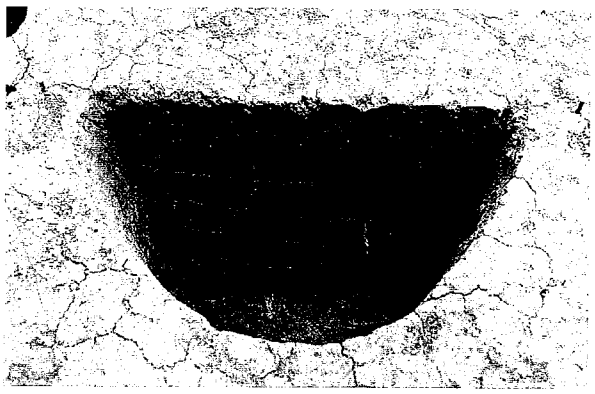
①カマド北側土層断面状況（東から）

②カマド南側土層断面状況（西から）

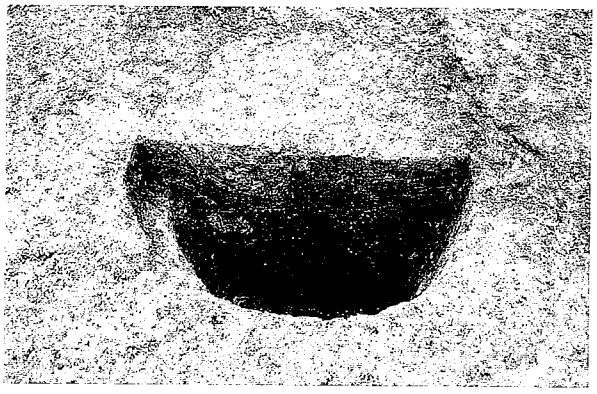
③カマド東側土層断面状況（北から）

④カマド完掘状況（南から）

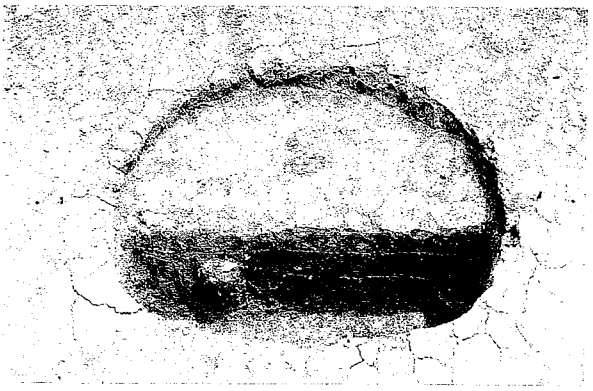
図版6



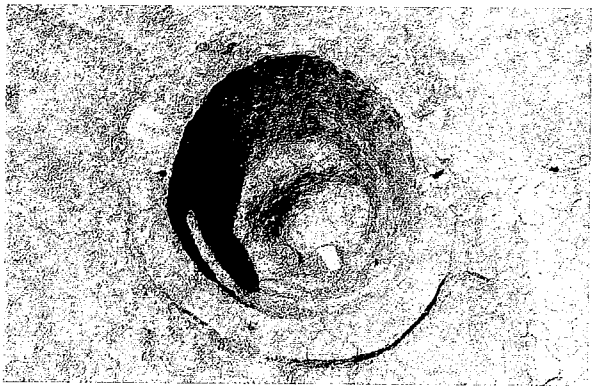
①1号掘立柱建物　1号柱穴土層断面状況（南から）



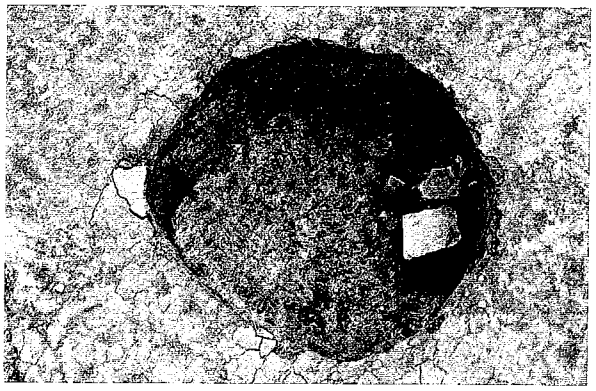
⑤1号掘立柱建物　4号柱穴土層断面状況（西から）



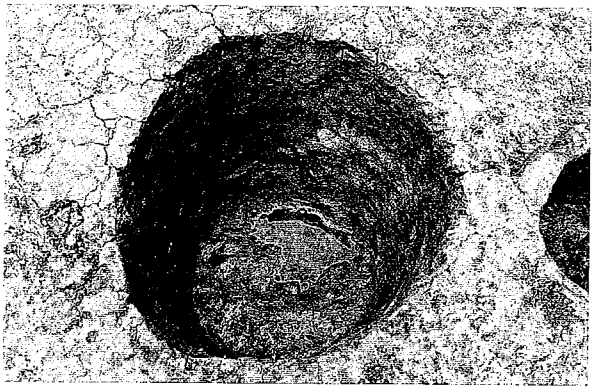
②1号掘立柱建物　2号柱穴土層断面状況（西から）



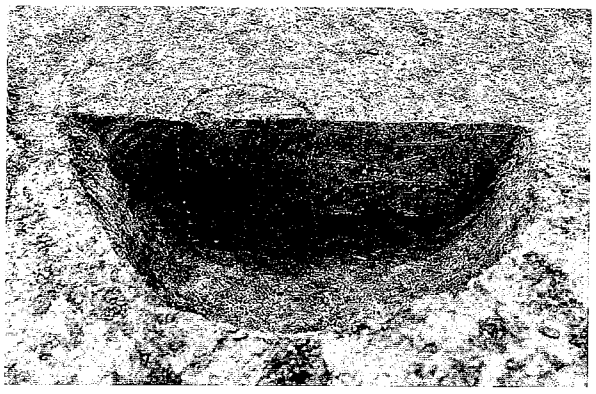
⑥1号掘立柱建物　4号柱穴完掘状況（南から）



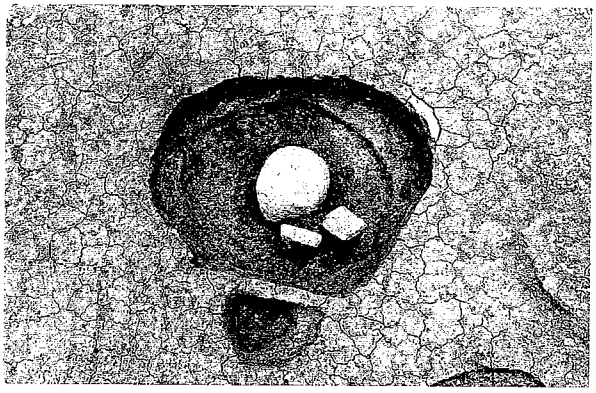
③1号掘立柱建物　2号柱穴完掘状況（西から）



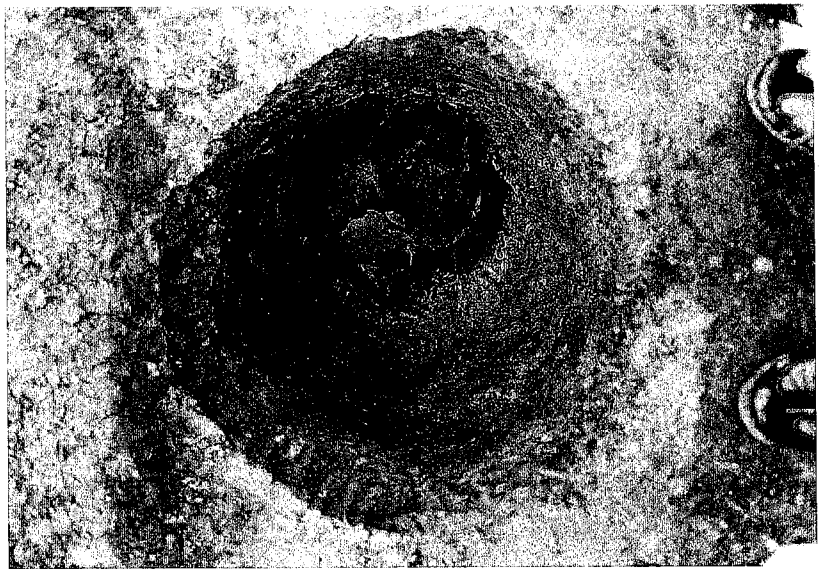
⑦1号掘立柱建物　号柱穴完掘状況（北から）



④1号掘立柱建物　3号柱穴土層断面状況（南から）



⑧1号掘立柱建物　6号柱穴（東から）



①カマド付随土坑内土器出土状況（南から）

②1号土坑　完掘状況（北から）

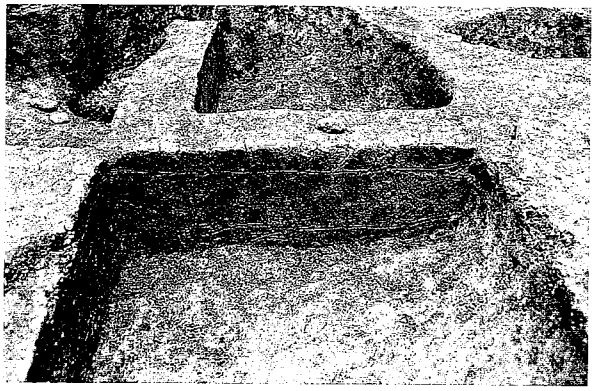
③調査区東側壁土層（西から）

④カマド完掘状況近景（南から）

図版7

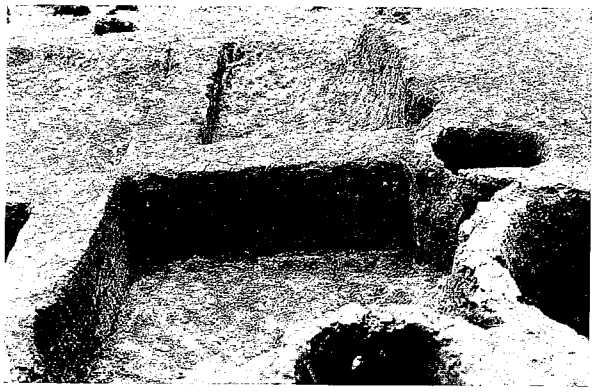
図版８

①１号掘立柱建物　１号柱穴土層断面状況（南から）

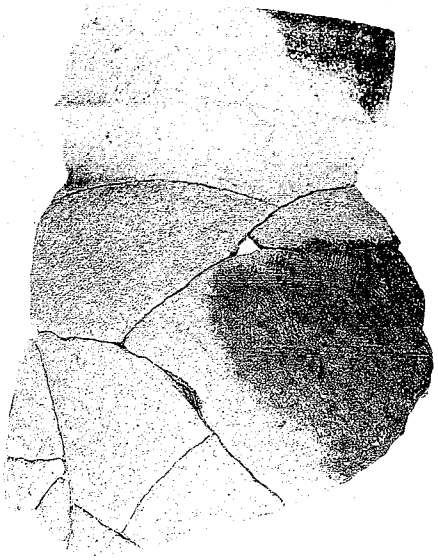


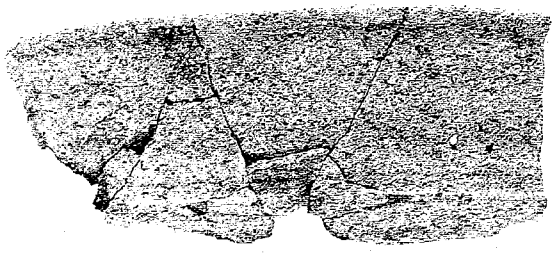
③１号掘立柱建物　４号柱穴土層断面状況（西から）

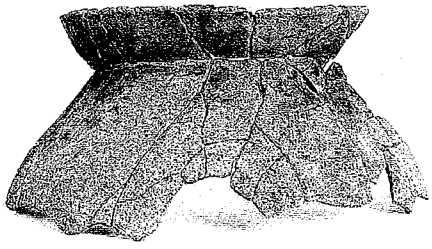
②１号掘立柱建物　２号柱穴土層断面状況（西から）

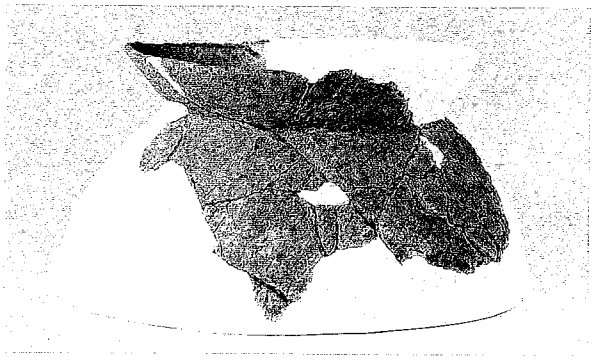


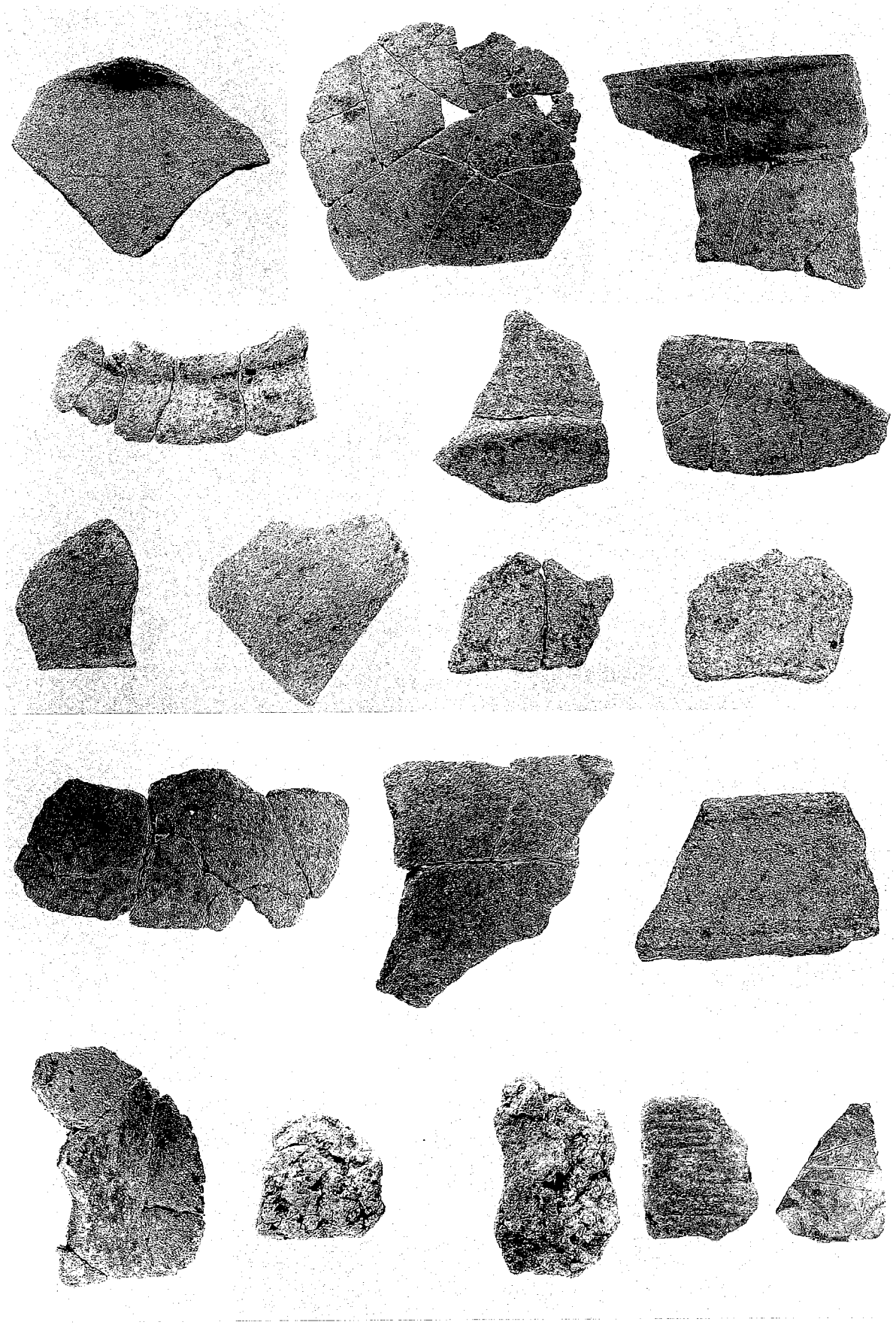
④１号掘立柱建物　４号柱穴完掘状況（南から）



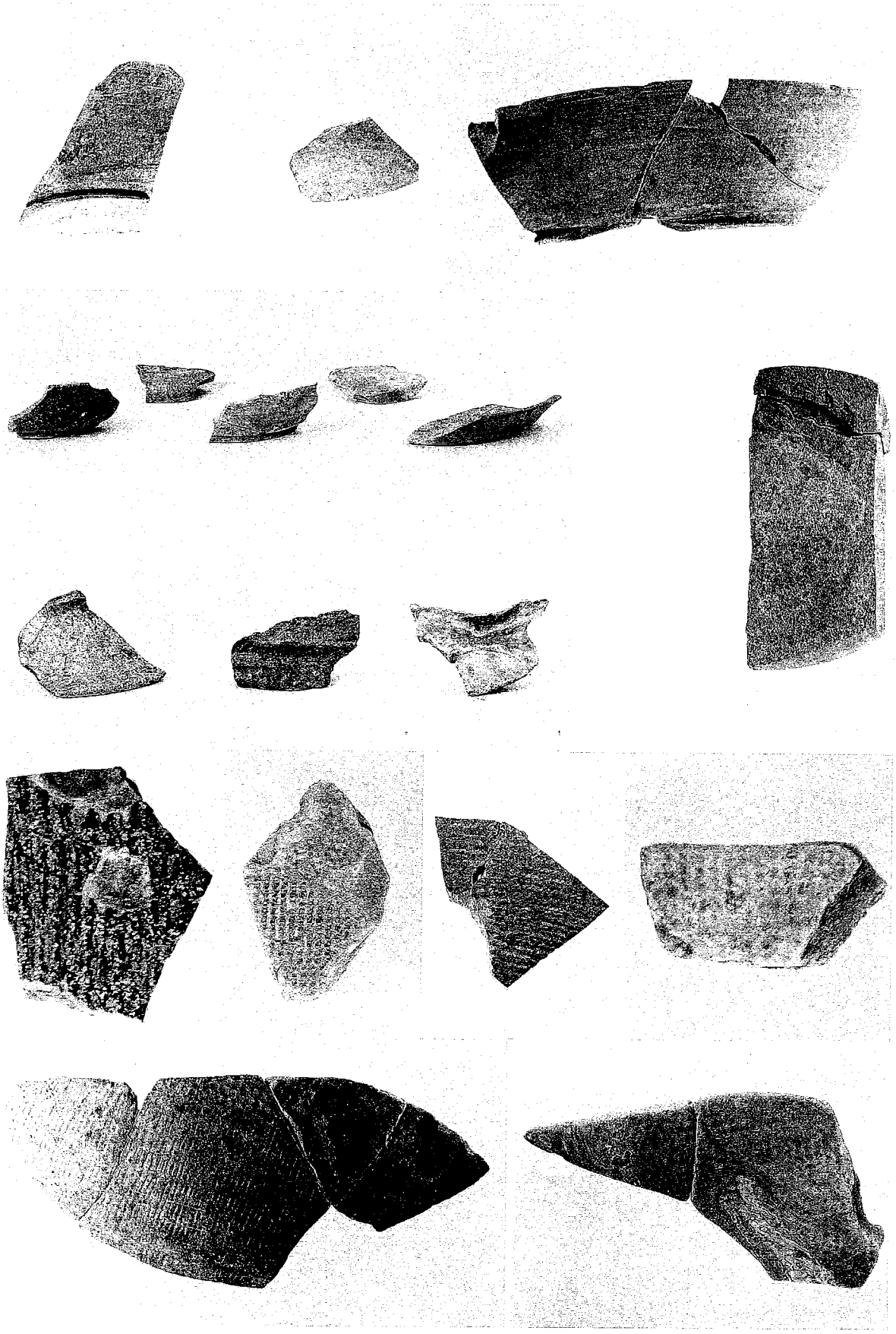


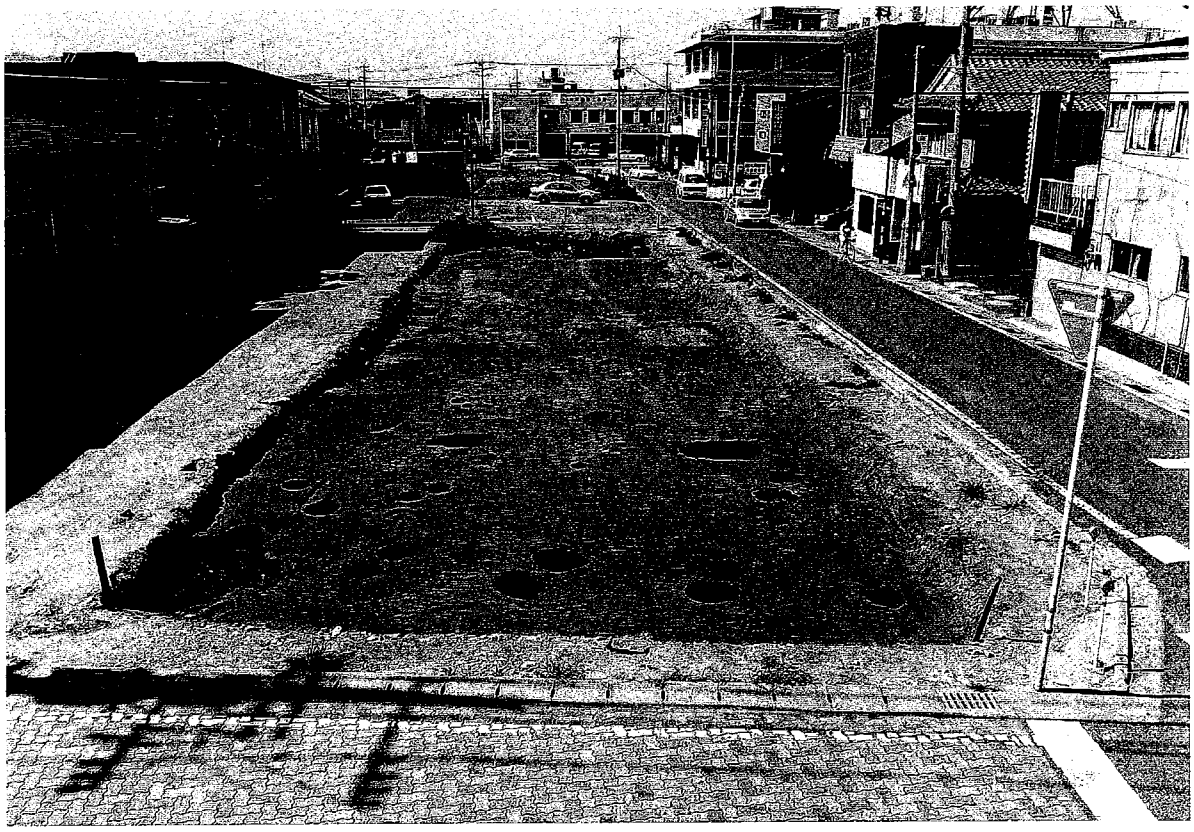




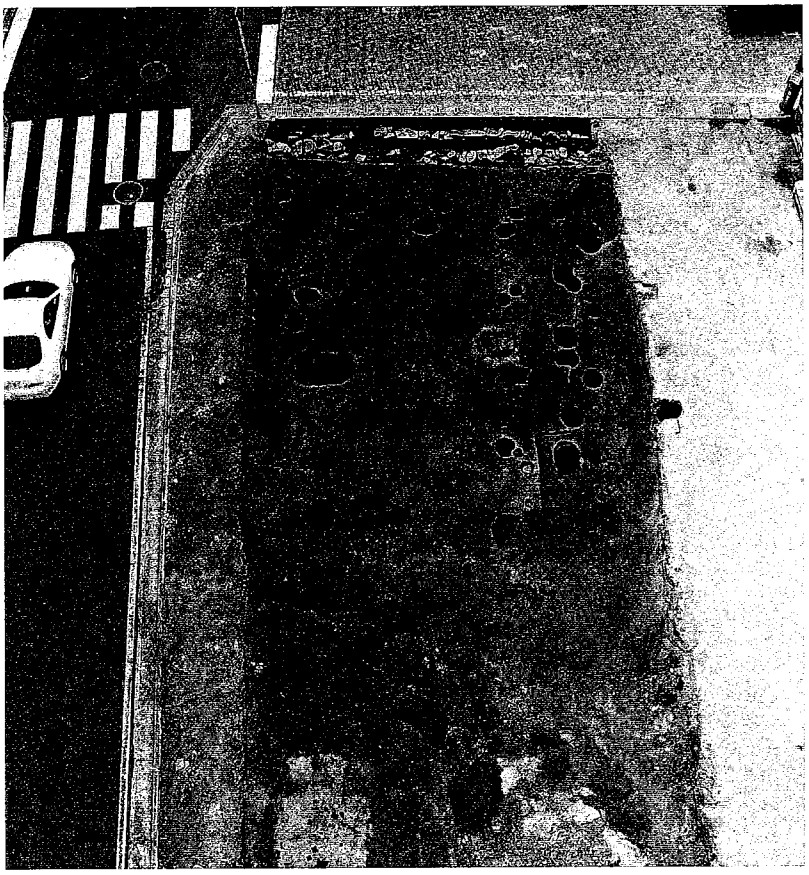


図版10



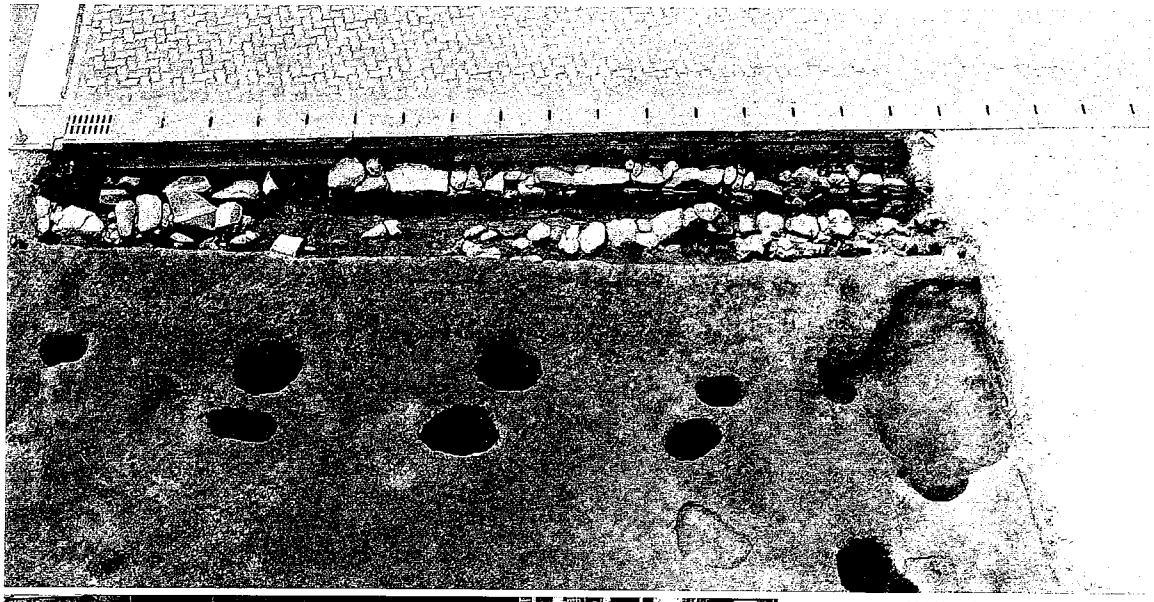


前原西町遺跡Ｂ区全景（南から）



前原西町遺跡Ｂ区全景（北から）

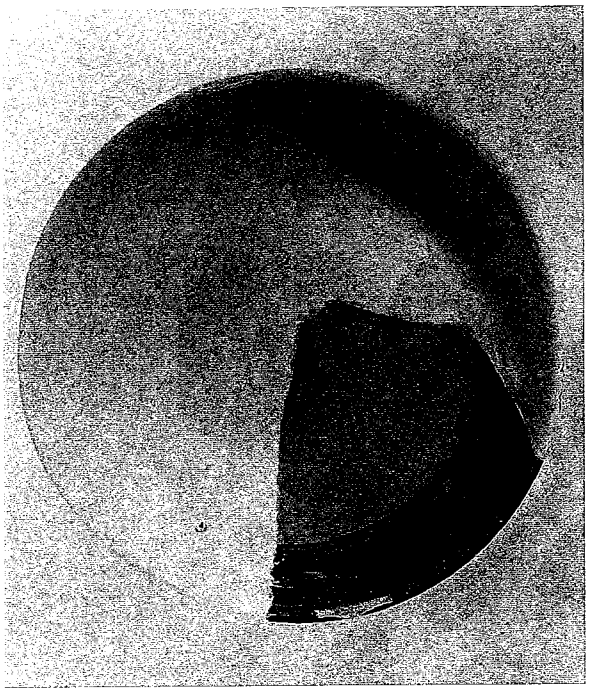
図版12

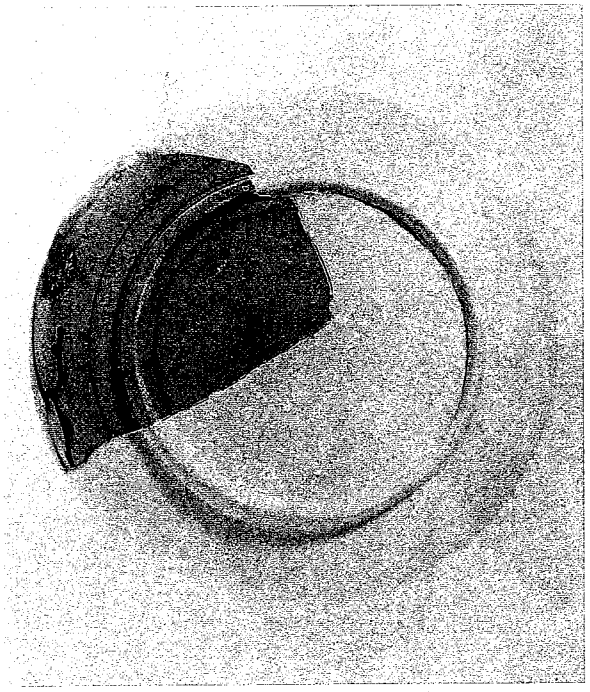


近世溝（北から）

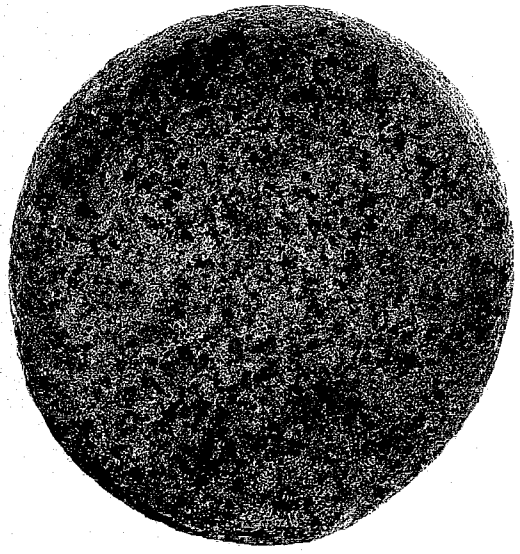
近世溝（西から）

近世溝（西から）

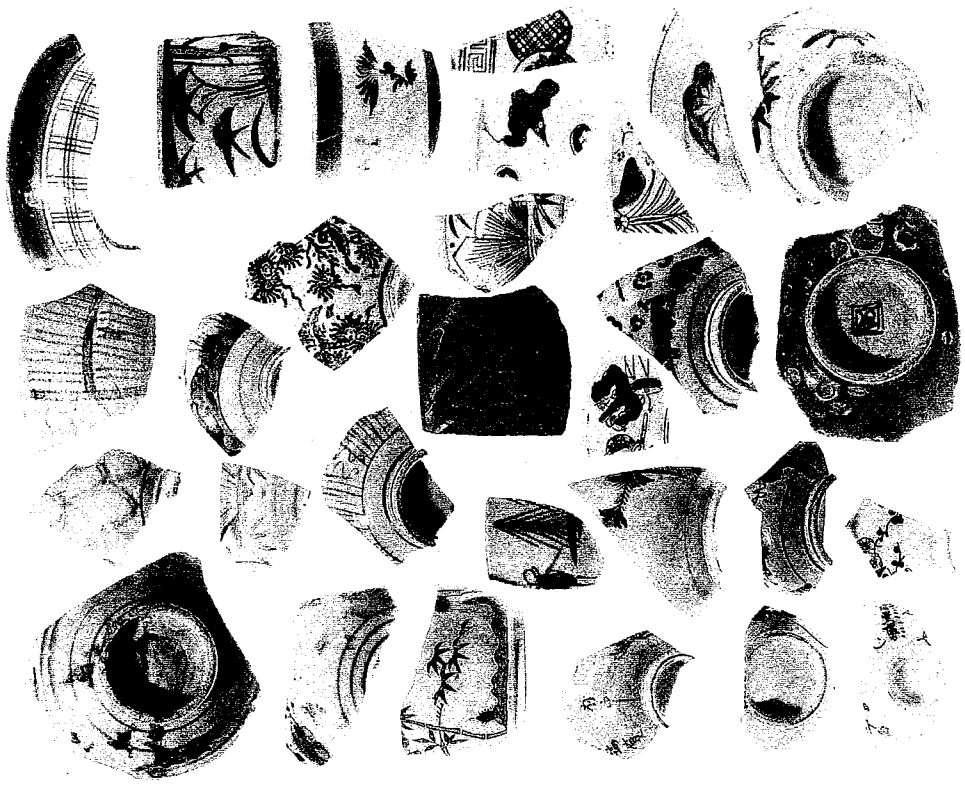


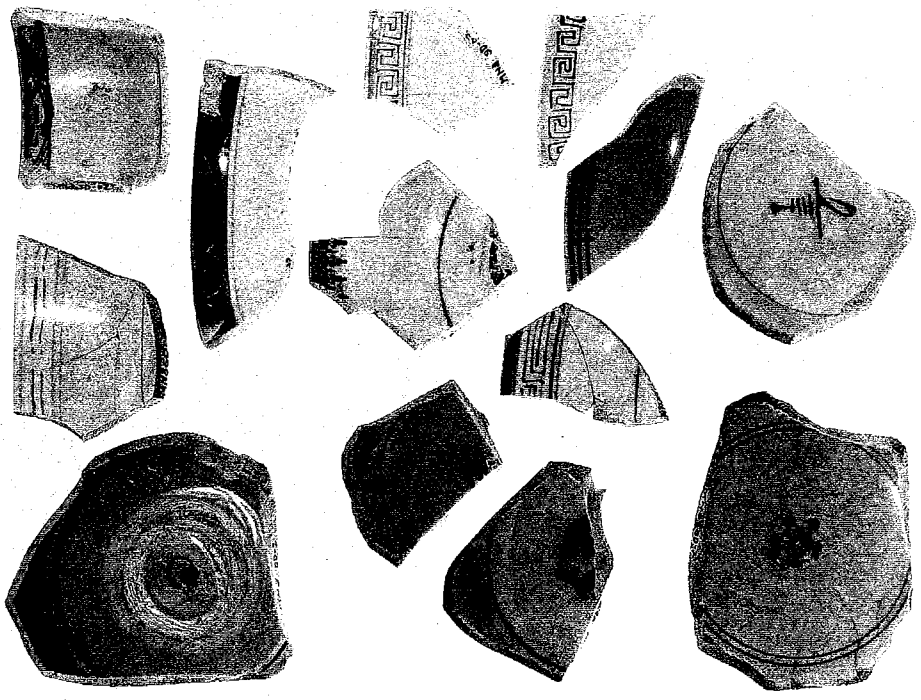


近世溝出土遺物

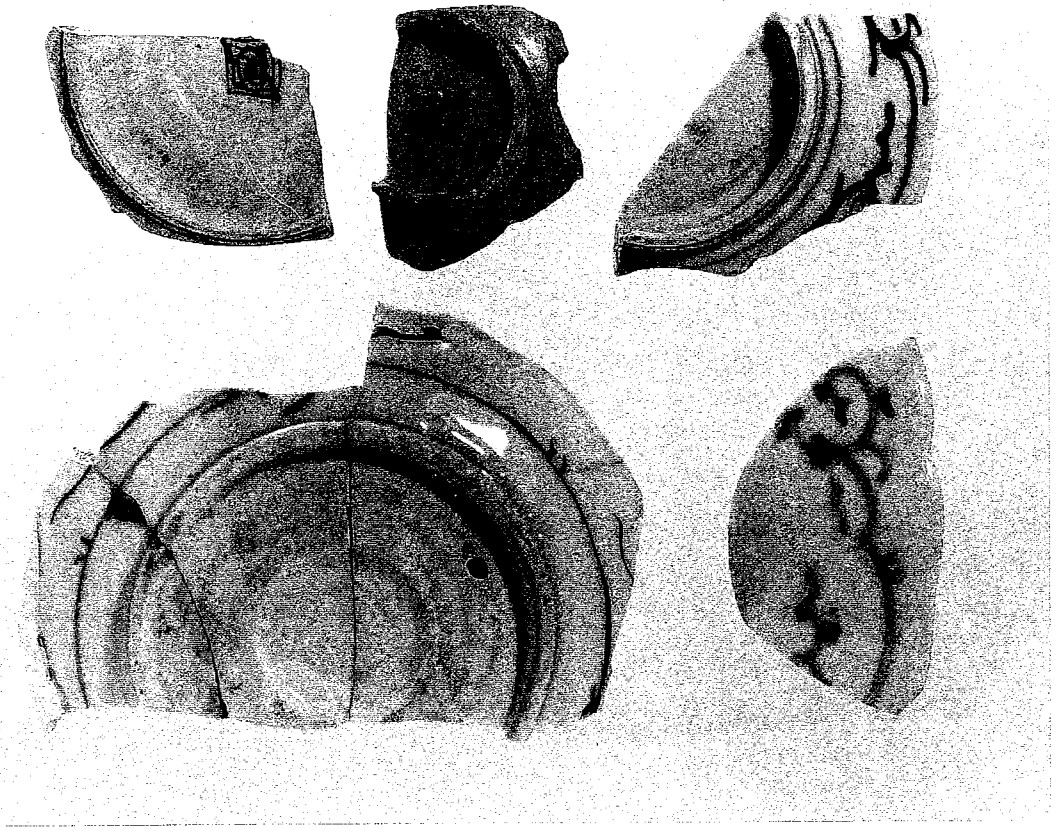


図版14

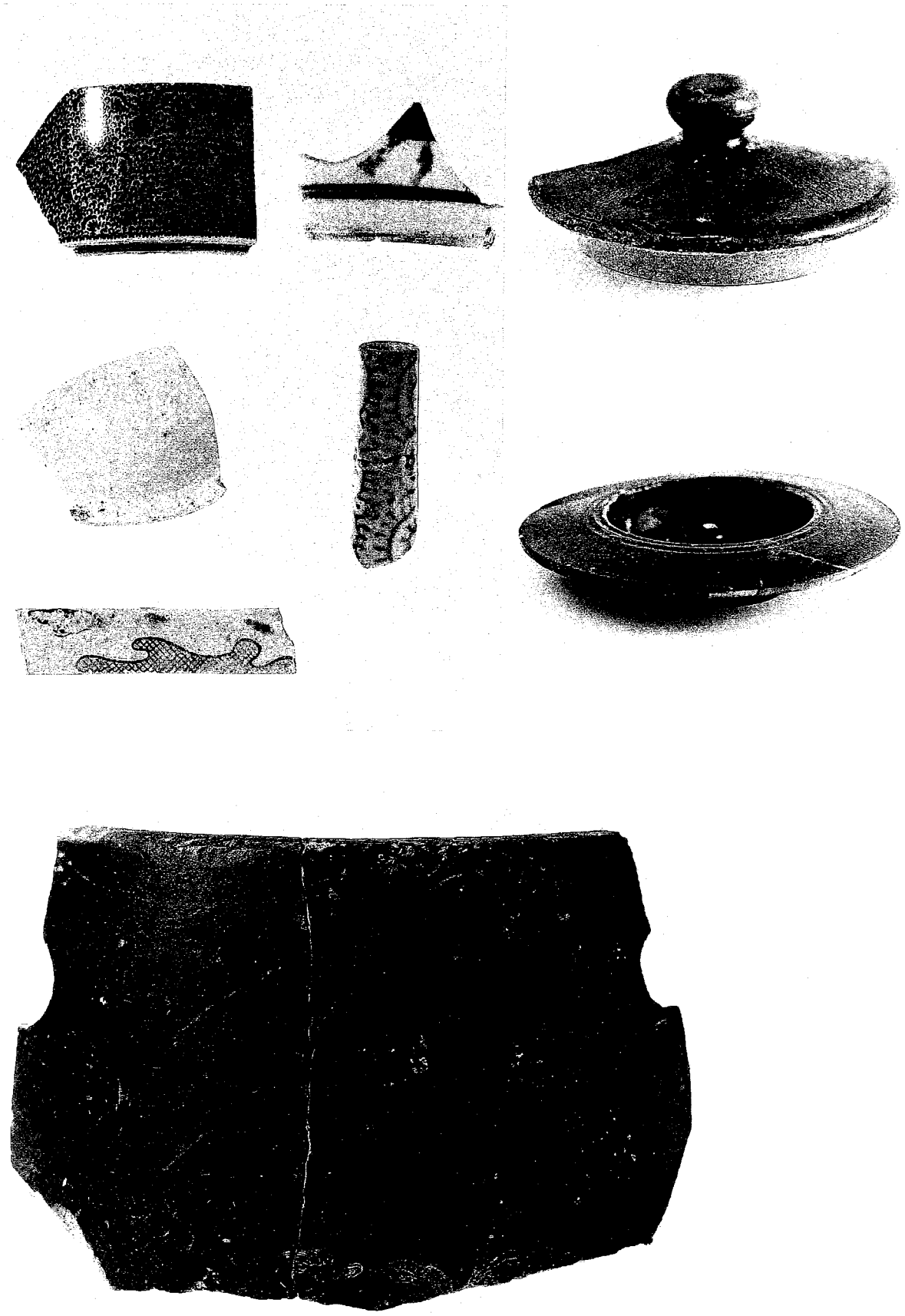


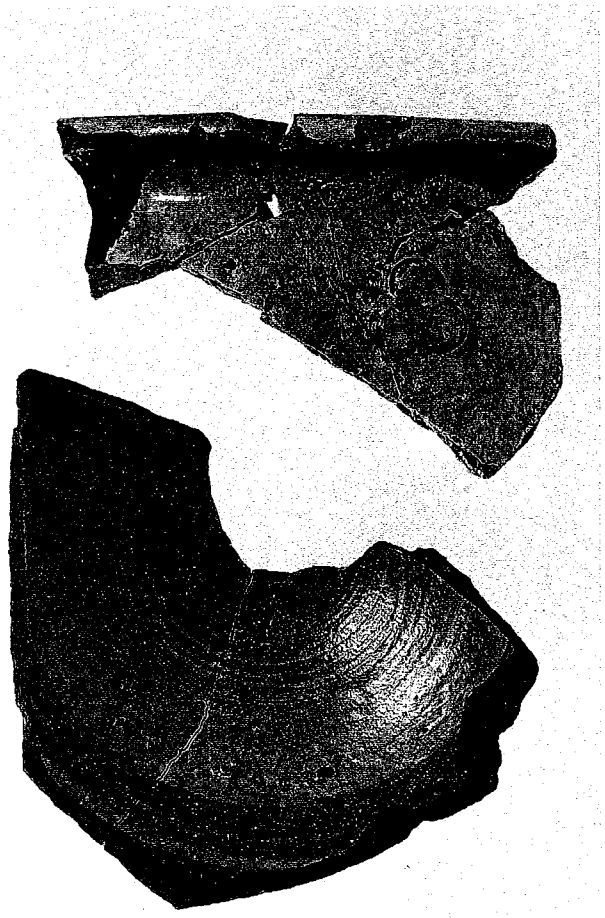


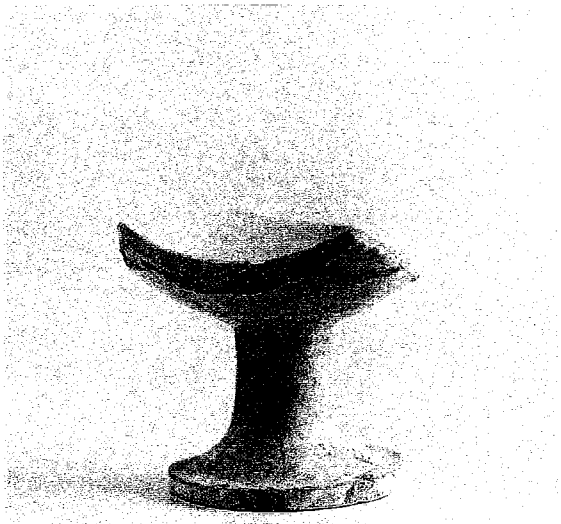
近世溝出土遺物（右：外面　左：内面）



図版16







図版18